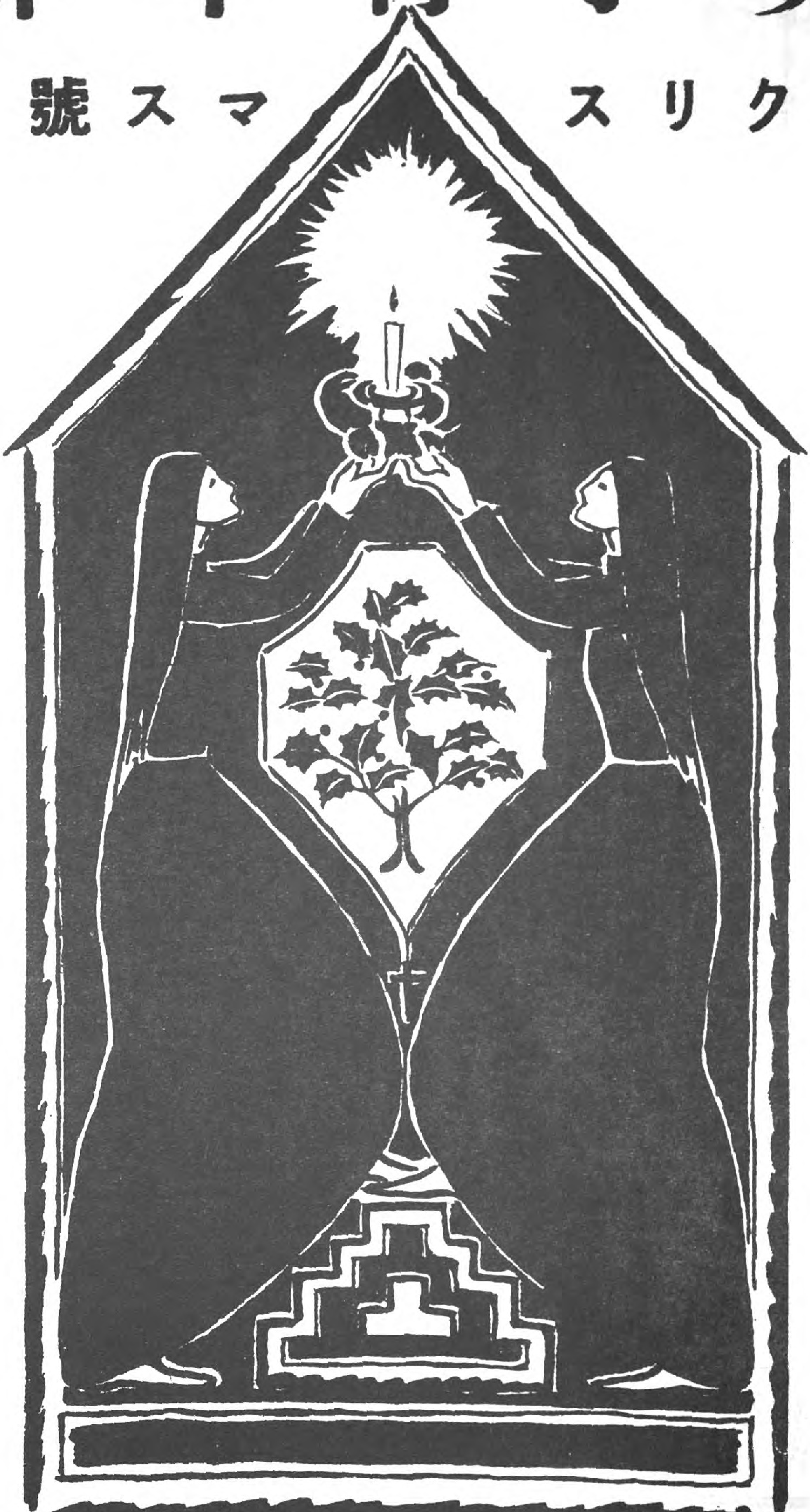
女子青年界

クリスマス號



大正十一年十二月一日發行（毎月一回一日發行）
女子青年界第十九卷第十二月號

二階堂眞壽著　〜〜　小松榮裝幀

新刊

創作 沈默の愛

四六版二二〇頁
寫眞三葉入
フランス式綴
定價壹圓參拾錢
書留送料十三錢

本書一度現はるゝや、若き人々の熱狂的歡迎を受け、日に數通の感激に充てる手紙は寄せられつゝあります。新聞雜誌は筆を揃えて日本文學には珍らしい程の深刻さを示せる作だと激賞しました。笈底深く秘められたる其稿を、ためらう著者を勵まし。懇請して、敢て江湖に紹介した私の希ひは充たされました。實に一粒の麥が地に落ちて死ぬるほどの初戀の苦惱に哭きし信一の熱き涙は、靈の泉となりて湧き出でゝ、渴ける心をうるほし、痛める魂を慰め激まして、高きに導くであらう。

□ ホウェル著　松原巖譯　**ダンテ・**彼の生涯と思想

四六版二〇〇頁　ナショナル裝函入　定價壹圓七拾錢　送料書留十三錢

□ 岡田哲藏氏　文藝評論　**知られざる傑作**

四六版三八〇頁　布裝上製函入　定價貳圓　送料書留十五錢

東京市麴町區元園町一ノ二三　**ロゴス社**　振替東京五七七五二

野邊地天馬氏著書八種

〔クリスマスの贈物に 新年家庭の讀物に〕

推薦	書名	體裁	頁數	定價・送料	版	内容
東京高師讀物調査會推奨 文部省認定書	近世 偉人物語	四六判上製	三七四頁 五號カナ付	定價一・七〇 送料・一〇〇	増補訂正	十九世紀より現代に亙る歐米偉人二十八名と日本人二名の立身物語なり著者三部作の一とす(口繪一葉)
文部省認定書	傑作を出した人々	四六判上製	三〇六頁 五號カナ付	定價一・八〇 送料・一〇〇	最新刊	世界的名聲ある藝術家二十四人の出世物語である。描寫生けるが如し、著者三部作の一なり(口繪一葉)
東京高師讀物調査會推奨 文部省認定書	母を慕ひて	四六判上製	三五四頁 四號カナ付	定價一・五〇 送料・一〇〇	第三版	孝道を敎ふる兒童文學、世界十五ケ國より三十のお噺を收む 著者三部作の一とす(口繪一葉)
文部省認定書	ワシントン物語	四六判上製	三二二頁 四號カナ付	定價二・〇〇 送料・一〇〇	第二版	服從と眞實を敎ふるジョージ・ワシントン傳・逸事逸話を交へつゝ其の一生を叙したるものなり(口繪一葉)
東京高師讀物調査會推奨 文部省認定書	童話 金の鈴	四六判上製	三一四頁 四號カナ付	定價一・五〇 送料・一〇〇	第二版	創作と飜案とに成り尋常二三四年位のお子樣に讀み得らるゝ五十八種のお話を收めてあります(口繪一葉)
文部省通俗圖書認定出願中	孤兒院の娘	四六判上製	二一一頁 五號カナ付	定價一・三〇 送料・一〇〇	最新刊	本書は孤兒院にある一少女の身上を描いて世の中を痛快に諷刺したる一面の人生觀であります(口繪一葉)
平井武雄筆 三色版九枚入	舊約物語	四六判上製	三六二頁 四號假名付	定價一・七〇 送料・一二	第四版	舊約聖書は、面白い、お噺の寶庫です、まづ斯んなお話がある、こんな面白い事が書いてあるといふのが、この『舊約語物』であります。
南薫造筆 挿畫九枚入	新約物語	四六判上製	三六八頁 四號假名付	定價一・七〇 送料・一二	第三版	本書は、現代の少年少女に、遠いユダヤの風土が心に描かれ、人物の活動、事件の推移が、目の當り見ゆるやう工夫いたしましたものであります

發行所 東京市麴町三丁目 振替東京七八四七

丁未(ていび)出版社

電話九段六六〇

出版書目進呈

大正十一年十二月號

女子青年界目次

第十九卷第十二號

喜多村進著　〰　喜多村進著

新刊

創作 靄

某教授の寄せられし手紙

前略……　靄は全く勝れた作品であると私は思ひます。柔かな、ほんとうに美しい藝術品で、私はすつかり自然と純な昔の少年に引き入れられました。餘りに醜い世相をのみ示して呉れる作品の多い今日此頃あんなにローマンチツクなものの出た事は著者に對して、心から感謝していゝ事と思ひます　私は早速あれを四五部買つて私の知つてゐる少女や少年達に贈らうと思ひます。あんな作が賣れ行きのあるのは尤だ。醜い人々の心を洗ふ爲め、もつと廣告して下さい。何だか作者と會つてみ度い様な氣がします。明日の講義の準備も忘れて今讀み終りました。…………

四六版二八〇頁
フランス式綴
定價壹圓四拾錢
書留送料十三錢

東京市麴町區元園町一ノ二三　ロゴス社　振替東京五七七五二・

777

女子青年界　第十九卷第十二號　大正十一年十二月一日發行

會說

黄昏より曙光まで

川戸環

人間の歴史は進展の歴史である。神の國の記録は成長の記録である。「偶然」といふ言葉は其の嚴密なる意味に於て、神の造り給へる字書には無い筈である。自然界の現象にも、精神界の作用にも、我等は必ずこの進展の公理を探り得る筈である。

路加傳は卷頭にイエスの誕生とそれに附隨した事實を敍述して居る。我等はこれらの詩の如き繪の如き場面に恍惚として卷を擱き能はざる感をなす。ユダヤの野邊星斑らなるあたり、白き羊の群を守る牧夫等、徐々と降り來りて悦を告ぐる輝きの御使、忽然として現れ來る天軍の頌榮は、この敍事詩の莊嚴なる前曲である。かくて詩は進み行く。ユダヤの山里深く引き籠り居る老女エリサベツを訪れた思ひ掛なきマリアの旅姿、二人の婦人の見かはせる感じに溢れた眼眸、喜びと感謝に高鳴る胸そのまゝとも響くエリサベツの祝福の歌、深き淵の如く底知れない平和を湛へつゝ寶座を仰いだ聖母の稱讃歌、事由も知らない親戚や友だちに圍まれつゝも自らは上よりの力に滿されこゝにはじめて舌の解けたザカリアが歌ひ出た祝歌、白髮の老シメオンがこの奇しき嬰兒

を腕に抱きつゝ、誦した歸去來詩には我等の心の緒斷も震ふ心地す。カイザルの布告に、所狹きまで旅人で詰つたベツレヘムの客舍、嘶く驢馬の槽に横る幼兒と側に侍する父と母、これらは我等を額かしむる妙なる場面である。然し更に振り返つて、此の繪卷物の淵源をも推し尋ねたい。更にその展開を追究して行きたいのである。

イエスの誕生をたゞ偶然の出來事とは、どうしても受け取れない。否、かほどの事實、二千年の人世史にかほど大なる波紋を起した誕生が、どうして計畫も豫期もなき出來事であり得やうか。イエス來つて死せる如き冬の世界は常世の春の生命を呼吸するに至つたのである。恐ろしき墜落が途中で喰ひ止められて登り坂になつたのである。物悽い暗黑を破つて曙光が見え初めたのである。「盲人は見、跛者は歩み、癩病は潔まり、聾者は聞き、死にし者は復活され、貧者は福音を聽かせられ」るやうになつたのである。即ちイエスはありとあらゆる罪の表現を驅逐し、其の根本を絶滅し、新らしき天地を造り新らしき靈魂を生ずるために來られたのである。この救の時代を來らすべく準備の行き届いて居たことは、人類の記錄を通して、殊にイスラエル民族のそれに依つて示されて居る。神は原始人をして道德人に進化せしめ給ふた。アダムとエバは智慧の果に依つて恥を知るやうになつた。律法（神と人とに對する道德）は我等の内に罪の意識を起した。律法が來らなかつたならば人間の罪惡もまた認めらるゝ便がなかつたのであらう。罪の解決は律法の與り得る所でなかつたが、律法は人の聖化されて行く途中までの良き導師であつた。律法は其の時代に於ては最大權威であつた。そして律法を輕んじこれに背いた人々を喚起せんために神は種々手を盡されたのである。この間に神の訓戒は、時に外寇の鐵鎚として時に流竄の憂目として、時に豫言者の苦衷として、イスラエルの民を訪れたのである。執拗く附き纏ふ罪惡の苦

惱はこれに依つて輕減せられず寧ろ行き詰つた切なさを靈魂に印象した。律法は人の行くべき道を示した。然し氣力の沮喪した人の意志は登る高嶺の嶮岨なるにいよ〱怖氣づいた。そのまゝ打ち捨て置くは倒死するを待つやうなものである。原始人、生れながらの人、肉の人は、神の尊嚴と已の罪を知ることによりて、更に高等なる精神教育の準備を受けたのである。然し新らしい道の門は尚彼等の面前には鎖ざされて居た。キリストの來らるべき時は迫つて來た。今や律法は全く行き詰つた。此の上手の擴げやうはなかつた。律法の創めた所を完成すること即ち道を切り拓いて人類を其の理想の極致に達せしむることは、神自らに依つて計畫されねばならなかつた神の意志を離れては我等の靈魂無能で手も足も出ない有樣である。神の尊嚴と我等の醜陋とは彼我の間に一大溝渠を穿つのみであつた。神の子たる資格のない人の子は、我からその資格を作ることが出來ない。故に神は自らその尊嚴の寶位を棄てゝ人類の間に來られた。人はナザレのイエスに於て神を父よと呼び得るやうになつた。「彼は神の貌にて居りしかども自らその神と匹しくあるところのことを棄難きことと思はず、反つて己を虛しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。」人となつた神に於て地は天と接觸した。イエスは單に途を示されたのみならず、彼は即ち自らその途である。彼はたゞ生命に導くのみでない、彼自身が生命である。眞理を敎ふる師といふだけでは餘りに冷たい。彼は實に眞理の實體なのである。その內のものにならば活動、休息、奉仕、禮拜がみな我等にあり得るのである。キリストなくば意識的にも或は無意識的にも靈性に死あるのみである。誠に彼は我等を生かすために、二千年前に世に來られた。かくて彼は「視よ我は世の終まで爾曹と偕にあるなり」と仰せられた如く、今尚生きて我等の生命である。罪人のために死なれた愛は、頑固なる我等をも導いてかの十字架上に罪を悔ひた盜人同樣「主よ御國に來らんとき我を覺え給へ」と祈らし

むるのである。

クリスマスの由來は、かゝる深き神意に基く。我等聲高らかに讃め歌ひて、心よりの祈りを捧げざるを得ないのである。クリスマスを悦ぶことが、恰も去年ドストエフスキーの百年祭をまた今年メンデルの百年祭を祝つたのに等しかつたなら、餘りに淺薄な話である。我等は現に生けるキリストを我等の間に有つて居るのであるから、日夜靈魂にクリスマスを經驗すべきである。キリストの恩寵に成長する階段はこれを蹈む都度都度正しく降誕を意味するものと見ることが出來る。願はくば我等の靈性にクリスマスの喜び常にあらんことを。

最初のクリスマスの悦びを享けた昔の人達の心理に暫し立ち入つて考て見たい。先づイエスの母マリアは如何にして救主の母たるべく選ばれるに至つたのであるか。我等は彼女が「心に記て思ひ回す」性質の人であつた事を知つて居る。靜かに深く仇浪のたゝぬ靈性の持主であつた彼女がイエスの敎育の大任に當つたのに不思議はない。此の大なる喜びの音信を告られたとき、彼女は救主の來られるを既に久しい間待ち設けて居たものゝ如くにそれを受けた。彼女の訝りしことはたゞその誕生の方式についてであつた。彼女はいまだ夫に適かざる身にどうしてこの事のあるべきかを瞬時疑つたのみであつた。そしてこの事の必ずあるべきことを示さるゝや「我はこれ主の仕女なり、汝のいへる如く我にあれかし」と答へた。この答をなしてよりユダの山里にエリサベツを訪るゝまで彼女は心中如何なる惡戰苦鬪をしたであらうか察するに餘りがある。處女の恐るゝ所許嫁の夫の疑惑や世間の誤解より大なるものはあるまいガリラヤのナザレよりユダの山里までは可成りの距離である。年若き處女の身で不自由な長旅を敢てした渇望の的はエリサベツの同情であつた。エリサベツは此の思ひ掛けない來訪にいたく喜んだ。彼女も神の國を待てる一人であつた。其の胎より生れんとして居る嬰兒が救主の先驅者であるべきことを以前

から示された彼女は、今や聖靈の御恩化とマリアの人格に對する鋭き直觀とから、此人が即ち救主の母であると知つた。彼女の歌つた祝福の歌はマリアを祝ふに始まり、次第に高調して神の忠信を頌め讃ふるに終つて居る。エリサベツはヨハネを孕て五ケ月間隱れて居たと路加傳に記してあるが、その間靜かに祈つて神の啓示を受けたのであらう。どうもこの祝福の歌は其の場で俄かに作つた即吟とも見えぬ。豫ねて熟しつつあつた信仰の表現がこの歌になつたのであらう。しかしエリサベツの歌はそれに續いたマリアの稱讃歌に比すれば稍遜色がある。マリアはエリサベツの結論を承けて歌ひ續けた。稱讃歌ほど神の大能とその憐憫とを妙に歌つた詩は舊約にもまたと見られないのである。マリアの眼はたゞ神の寶座とその御業に注がれて居た。その眼の着け所が實に高い。かゝる態度であつたから、四圍皆疑惑と誤解とであつたうちに、亂されぬ平和を湛へることが出來たのであらう。マリアの歌の高尚なることはいふまでもないが、その深みを更に増してザカリアの口に歌ひ續けられた。マリアの歌はまだ舊約的であつた。まだ救の奧義に達してをらなかつた。ザカリアの頌歌に於てキリスト教の救の意味が始めて示されかけて居る。「神の深き矜恤により其罪を赦されて救はれん」「幽暗と死蔭に住る者を照し我儕の足を導きて平康なる路に至らせん」などは眞に新約的である。この歌を合圖としてザカリアの舌は解けた。固より「神の前に義しき人」であつたザカリアは聾啞の十ケ月間に此の上もない信仰の鍛錬、祈、默想の機會を與へられたのであつた。この驚くべき祝歌はその信仰に相應した表現であつた。けれど神の啓示の奇しくも漸進的なることよ。老豫言者シメオンはザカリアの歌にその廣さを更に加へて「萬民の前に設け給ひし救」「これ異邦人を照さん光」と歌つて居る。この人について路加傳は「此の人は義しくかつ敬しみありてイスラエルの民の慰められんことを俟る者なり聖靈その上に臨れり」と記してある。歌

は更に進展して遂に天の使の頌榮がクリスマスの日の喜びを響かせた。「天には榮光、人には恩寵地には平和」と。かゝる大なる理想はキリスト教を除きて他には見らるべくも思はれない。然しこの立派な天の使の歌はかの素朴なる牧夫等の有つた感想の反映であることを忘れてはならぬ。この天つ調べを聽く準備と素養とが牧夫等の心に出來て居らなかつたなら、彼等は竟にそれを聞かずに了つたであらう。天の使の頌榮は同時に名も無き牧夫等の無聲の頌榮であつたことも忘れがたき事實である。歌ひ得る心を持つ者は幸である。歌ひ得る心は默想にのみ伴はれるものでない。牧夫等は極めて平凡な勞働生活をば全力を盡し考へ深く充實せしめた人たちであつた。ザカリアは神殿の雜務に孜孜として從事して居た。マリアも貧しき家の女なれば定めし糸繰り繕物などに忙しき事であつたであらう。我等の歌は平凡なる日常生活の間にも詠ぜられるものであらねばならぬ。但し其の背景に靜かな祈りと默想との存在して居るべきとはいふを待たない。且つ我等の歌はいよ〱廣く深くならねばならぬ。祝福の歌より稱讃歌に、祝歌より歸去來詩に、そして頌榮に、心のたけを注ぎ出すとき、眞にクリスマスの喜びが經驗されるのである。

頌榮に於て人類の救の要點が覗はれる。凡ての榮光が神に歸せらるゝとき、神の愛と恩寵とがキリストに由りて人類に現れ來るとき、神と人との間に平和の成立するとき、始めて神の屬性なる平和、永遠の平和が我等の世界に來るのである。

クリスマス目出度きものと喜べる
大人はよろし子供よりよし　（てい子）

聖誕を怖れし人々

青芳勝久

基督者から見るクリスマスは何よりも喜ばしいものである。暗い世界が明るくなり始める冬至の頃に、私共の靈魂の暗を照す榮光の主を仰ぐのは、天に叫び地に呼はつて祝したい事柄である。けれども私共は、主の降誕を不可解なりとて、なかには人生に亂入者を迎へたやうな驚きと怖れとを以て接する人のあることを記憶して居りたい。聖誕を喜び迎へし人が昔にゐたと同時に、是を怖れた人があつた。彼等の歡喜と恐怖とは、地上に現はれたるイマヌエルの尊い姿に人間が投じたる光と影とである。若しも地に住める凡ての人が聖誕を歡び迎ふる程に祝福されて居たならば、其地は既に天に迄高られて居るので、主は迎へずとも在し給ふた筈である。それに反して若しも地の人が聖誕を迎へる心がなかつたものならば、それは其儘に地獄である。「光りは暗黑に照る、而して暗黑は之を悟らざりき」と記されては居るが、是れを書いた人は光明を悟つて居た人であるである。であるから聖誕を迎へたる當年の人々の中には、兼てから待設けて喜んだ人、初めは怖れて後に喜んだもの、及び初めは怖れて終に是を憎んだものゝ三種があつたやうに思はれる。その中第一種の人には拘らないで、私は第二と第三の人について考へたいと思ふ。便宜のため區別すると、

一、ヨセフの怖れ

二、ヘロデの怖れ

三、牧者等の怖れ

一、ヨセフの怖れは愛人を有つものゝ怖れである純潔にして素朴なる田舍の一青年が、行末かけて誓つて居た處女が、いつしかに姙娠の身になつて居るのを發見した時の怖れである。愛人に係はれる汚はしき惡評だにも堪へ難いのに、既に拒むことの出來ない結果が身に現はれて居るのである。是迄は樂しい家庭を夢想して居たヨセフの夜の夢を脅すものは己の愛人マリヤが、ヨハネ傳八章にある不義の婦人の如くに、隣人等に爪揮きせられつゝ、市の外に引出されて石にて撃殺さるゝことであつたらう。「世にくるしきは澤なれど、神かけて望をおきしその人のまさなうも卑しきさがを表はせるを見んほど苦しきはあらずかし。わが戀人の僞りを見むよりは、むしろわが身の死にたらんかた、いかにはるかに幸なるべきぞ。「さつぼお」の死や晩かりし」と明治の詩人も歌つて居る。

けれども私共は、ヨセフの怖れには、已れの身を潔白にしたいと言ふ別の動機をも含んで居つた。彼がマリヤの姙娠が顯はれたる時に、私にこれを離縁しやうとしたのは、まだ衆人に氣付かれずに居るマリヤの姙娠を、本人から竊かに打開けられた時の彼の心持であつたと思はれる。妻として受入れず、さりとて、離緣狀を與へて公然離婚するでもない、內密に離別すると言ふのは已れが前者をとればマリヤを擁護することになり、後者をとればマリヤを石擊せしむる第一步を作ることを恐れたからであらう。「正しき人」の道義的觀念と、「ダビデの子ヨセフ」の家名を重んずる精神が、彼をしてマリヤの係累になることを體よく免かれしめんとしたものと察せられる。私は此の塲合のヨセフの恐怖の原因は信仰の足らない點にあつたと思ふ。マリヤが天使ガブリエルの前で言つた「見よ、われは主の婢女なり、汝の言の如く我になれかし」と言つたやうな信仰がヨセフにはなかつたからである。救主が已と已の配遇者との間に入り來つた時に、マリヤは聖旨に服し、ヨセフは妻を離別しやうとした。二人をして異ならしめた

ものは相互の愛情の點でなくして、マリヤにあつた丈の信仰がヨセフになかつたからである。此夫が此妻の信仰の境に達したる時に始めて Holy Family か成立した。

家庭の基調は夫唱婦和でもなく、相愛相思でもない。基督者の結婚は「相愛する」と言ふ以上に「神の合せ給ふもの」と言ふ確信が要る。「マリヤを納ゝことを恐るな」と言ふ聲が、天より、第三者から來らなければならない。變り易い人の愛情によりて結ばれずして、渝らざる神の愛情に身を委ねるのである。愛情を生み出す不斷の源泉である信仰があつてこそ私共は家庭の樂しさを歌ふことが出來る。夫婦の間に生れ來る基督は、其離間者でなく、介在者でなく、其祝福であり、連鎖である。

二、ヘロデの恐れは罪深き我儘者の怖れである。凡そ歴史の上にもヘロデの如き利已主義者はその數が少いことであらう。人民を懐柔せんとして造營したエルサレム神殿の改修、及びサマリヤの神殿の如きは彼の人物を善意に了解する餘地があるとするもその妻ミリアムと、妻の兄弟アリストブルスと、アレキサンデルとの三人を殺し、更に實子アンテパトルを殺して、アウグストをして「ヘロデの子になるよりかも豚になつた方が優しだ」と歎ぜしめたことは彼の品性を證するものと見る外はあるまい。已の臨終の床に見舞に來る猶太國の重なる人々を演技場に幽閉して兵卒をして警戒せしめ、已が崩御したる報を得たらば直に場内の人々を鏖殺せしめんとしたるが如きは彼が尋常の惡人でなかつたことが知れる

斯くの如き利已心と殘忍性との權化が、聖誕のことを耳にして「惱みまどふ」のも怪しむに足らない彼は「ユダヤ人の王」が生れたので、自已の王位の危かるべきを恐れたのである。强大なる感化力を有する人格には、人の向背を決定させる能力のあるもので、敵と味方との振分けを明瞭にするものであるパウロでさへも至る處に於て尊敬と物議との種になつて居たのであるから、耶蘇の降誕がヘロデの罪惡

をして更に多からしむる機會となつたのは是非もない。主義的の人は事ある毎に必らず罪を加へる。

我々はヘロデの如き暴君を憎む。けれども暴君は必らず王位に座して居るものゝみてはない。利己的な人間は何れも或程度迄の暴君である。人は其才能と品性に於て大小高低の區別はあるが、多少の支配權は必らず有つて居るべき筈である。隱し場もなくしてナイル河に捨てられた嬰兒にも、神はパロの姫君の心を支配する能力を與へて居られた。カンパランドの老乞食にも詩人ワヅオースの不朽の筆を動かさせるインスピレーションがあつたではないか。人間の罪惡は、彼等に通有の此支配權を、萬有の支配者なる神に歸せずして、己の慾望の爲に濫用するものである。耶蘇の降誕を聞いて、恐れたるヘロデはお山の大將が宇宙の主權者に叛逆したるものであつて、其心理的過程に於ては、美しい心と姿とを有して家庭の女王たるべき女性が、神の道に反いて己の安逸と社會の惡習との爲めに生涯を泥濘の中に投ずるのと少しも變らない。同じ基督を見て、「彼は必らず盛んになり、我は必らず衰ふべし」と言つたヨハネの言葉こそ神の眞實の榮光を拜したる心から出たるものである。「神よ、願くば我をして貞操正しからしめ給へ」と言つて神の支配權を認めたオーガスチンの靈にも、尙叛逆の心が殘つて居た、そして、「されど神よ、今にあらず、今にあらず」と言つて前の祈りを取消さしめたのであつた。

子貢が縣令になつて赴任しやうとした時に、師の孔子に向つて訣別の語を乞ふと、孔子は彼に答へて「汝盜む勿れ」と言つた。子貢は顏色を變じて、師か己を見ることの餘りに卑いのを怨んだ。孔子は彼を訓して、「汝は盜みの意味を知らない、盜むとは善を取つて自ら與ふる謂である」と敎へた。他の善きものを取つて私するのみでなく、神の善きものを取つて、神を敵視して迄も我意を通さうとするからして私共には眞に世を益する力が出て來ない。家庭を和樂ならしむる精神が生じないのである。カイゼル

のものはカイゼルに返せと言ふが、カイゼルは神から貰はざる何の權力を有つて居るか。「主よ。我爾を離れて誰にか行かんや、生命の言葉を有てるものは汝のみ」と言つたペテロや「我等彼の榮光を見るに眞に神の生み給へる獨子にして、恩寵と眞實に充てり」と言つた使徒ヨハネは、巳の靈眼が開かれて、神より來る愛の支配力に身を托したのであつた。彼等は基督によりて眞實の自己が生れ出づるのを經驗したのであつた。靈魂の故郷を離れ光なき暗黑の世界に在りて、汚穢にして生命なかりし彼等が「凡ての善美なる賜は上より、光明の父より來る」のを知つたのである。

三、牧者等の怖れ

猶太人は神を見ることを懼れた。これはたゞ「牧者等大に怖れたり」とある牧者のみではない。イザヤ、エゼキエルの如き宗敎的天才と雖尚神を見ることを怖れた。否、此怖れは、啻に猶太人のみでなく希臘人にも、印度人にもあつた。前者に於ても後者に於ても、神は大なる宿命である。父を殺し、母を犯したる希臘のエヂプスの傳説に現はれたる思想の如き、或は又岩角に縛せられて、猛鷲の爲めに肺腑を攫み食はるプロメテウスの如きは、何れも宿命に飜弄せらるゝ人間性の慘狀を語るものである。印度人が宇宙の神秘の前に平伏し、自巳を卑しみ、悲觀に傾き、自殺にも等しき沒我の生活を高調するのは是れ皆神の前に萎微焦瘁したる人間性の狀態である宗敎の方面から轉じて文學に見ても、異敎のそれは必らず悲觀的であり、絕望的である。

上に述べた恐怖の原因は何處から來るのであるか深い罪惡意識から來るものであるか。勿論それも一つの原因であらう。或は又罪を知れる上に、更に神を見たるが爲めであるか。私は其處にも原因があると思ふ。けれども最大なる原因は、仲保者のなかつたことである。救主なくして、罪を自覺し、且　を見たからである。神の偉大と聖潔とに罪人が壓倒せられたのである。此種の恐怖から生ずる宗敎は献物

の宗教である。宗教と言ふ羅甸語が示す如く、神と人との間係の絶たれて居たのを、献物が「再び結び合はす」のである。けれども其宗教は、要求であつて、決して滿足ではない。

基督者は基督の犧牲から生まれるものである。幕末志士の赤誠から現代の日本が生まれ、懦夫をして勇に、貪夫をして廉ならしむるが如くに、彼の人格が我々の中に新人を生み出すのである。罪惡の外樂しむものなく、義を見て遷る能はざるものが、彼を仰いだる刹那から能力の身に溢るゝを知り「今我が肉體に在りて生けるは、我を愛して、我爲に生命を捐てしもの、即ち神の子を信ずるに由りてなり」とあるが如くである。

要するに、基督無き家庭と國家と、宗教とは何れも恐怖を免れない。基督無き家庭にも和樂はあらう圓滿もあらう、然しながらそこには家族の各員を通じて現はるゝ神の榮光がない。また基督無き國家にも相當な文化と、富强とはあり得やう。然しながら外國を恐るゝ念慮が絶へないが爲めに國防軍備の精神を忘るゝことは難く、人類愛の精神を產出すことは難い。また基督無き宗教にも思想の深さはあり得やう、けれども飢へたる靈を飽かしめ、罪人を救ふ能力はあり得ない。神には榮え、地には安穩、人には惠みあれと歌つた天使の歌は、今尙餘韻を明かに聞くことが出來る。パウロは言つた。「我等の受けし靈は、怖れを抱く靈に非ず、アバ父と呼ぶ、子たるもの、靈なり」と。

許し

「許しは神々しい心です
人を許す人、重ねて過てる人をまた許す人は
神のやうな人である
許す事をし惡を忘れる人は二重の祝福を受ける
――腕を擴げて眼を見はつて
優しい言葉で敵に安らかな心地を與へる人は
過ぎ去つた事の爲にとがめだてせず、
何も惡い事のなかつたやうに振舞人
かゝる人こそは親切な、忠實な高尚な人で
世の人々よりは愛され神からも愛せられる」

旅行一束

河井道子

上海日本基督教會婦人會の招待で、彼の地の傳導應援に出發せんとする其日に、十一月中に於ける女子青年會の働の一部を讀者に紹介し度いと思ひます昨十四日より横濱女子青年會は、二萬五千圓の募金にかゝり是を二週間内に成功させんとの希望であります。幹部委員、會員、職員一同が實によく心を協せ此擧につき勇氣を以て着手さるゝ其光景は周圍に感動を與へずには居りません。其準備として幾週間をも費し、日々團體、個人の祈が捧げられ御榮の爲に、此金額を得て横濱市の發展に貢獻し度いとの美はしい希望と、努力は良成績を擧ぐる事と信じます十三日夜記念館にて、青年會を紹介せんが爲、幻燈と小パゼントがあり、來會者一同によき印象を與へ其上に新任安河内知事が如何にも同情ある奬勵と、理解ある寄附勸誘とを講壇から述べられた事は、此擧の手始めに偉大なる力でありました。此の募金運動が萬國基督教女子青年會祈の週間に計らずも計畫された事は、彼等にとつては大なる原動力となりませう。

東京女子青年會は、此春市内女學校の競技會を主催し、此秋登山ケ原にて再び其主催となつた事は、確に世人に女子體育の必要を知らしめ、他の會や新聞社などが斯道を奬勵する一原因をなした事は確だと思ひます。ミスマーシャンと言ふ、體育専門家が同青年會に赴任して以來、益々體育上の新しき研究や催しが會の内外に行はれ、多くの女教師方の研究

に便宜を供するに至つた事も感謝すべき働の一つであります。

神戸青年會はタピング幹事が遽に御都合上米國に一ケ年間歸られし爲淋しくもなり、又多忙にもなりました。久しく同會館に縣廳の依頼により渡航講習所を置いて居ましたが、今度此事業は他に移轉する事になり從つて、爾來縣廳より毎月家賃として拂はれたものが入らなくなりましたので、他の方法を以て塡充なければなりません。去る九日の午後小集會を催し、十數名の婦人方に此事を訴へ特別に此爲に年百圓の寄附者を募りましたが殆んど其成功を見ました事は此の仕事がどれほど人々の同情を得且つ良き成績を擧げつゝあるかを立證するに足ります。十一月中に文化的活動寫眞をもつて、經常費をつくり、御殿場の建物に寄附せんとの策をたて皆大元氣で是が計畫中であります。

大阪青年會に立寄りますと先づ玄關の戸を開けますや所せまき迄下駄が並び居り、階上、階下に笑聲の滿てる有樣に喜びと感謝を禁じ得ませんでした。當夜は前夜と相つゞき大阪白木屋商店の女店員百數十名の慰安會を催したのでした。最初に會の者が造つた手輕のライスカレー、ドーナツなどの夕食がありそれより二隊に分れ、樣々の無邪氣な遊戲、音樂で慰めほんとうの共樂を味つたのであります。最後に一同相會し、讃美を歌ひ、宗教的奬勵をもつて九時に散會しました。此の不況氣な際ではありますが、同會は祝され今や十四萬圓の建築に着手する次第であります。其金額中既に十一萬五千圓は集つたと言ふやうな事も、全く大勢の犧牲と同情と努力との上に神の御祝福の下つた結果と存じます。來年の六月迄には美しい會館が市の中心に出來て、基督敎の働に一色彩を添へる事と存じます。

十日には京都に參りましたが、同市の青年會は未だ公式に組織されたものでありませんが既に三百近き會員を有し、六人の内外幹事を持ち堅實なる土臺をする敎會、學校及社會一般より歡迎される位置を

占めるやうになりました。今月中に廉賣を催し、必要品を出品する計畫でなか〳〵其工夫に富んで居る事は外より來る者の驚く處であります。例へば米國より毛布を輸入し、市價より遙に安く是を賣る事、厚紙にて買物袋を作り臺所用に紹介するなど思考は非常に奇拔です。會館として借りて居る所は日當のよい、あたりに青々とした庭を持つ上品な小じんまりした建物ですが、も早や狹隘を告げて將來の計畫に忙しくあります。此會館にて集會を催しロシアの狀態を訴へましたのに直に十七圓の寄附が集り、進んで女子青年會の主義、其働について語りましたかいづれも滿腔の同情を持つて京都市の必要なる働の一つとして、青年會を擁護する決心の現れましたのも働く者には大なる奬勵で御座います。ついでに同志社女學校の青年會主催の集會に行きました、幹部委員は市內の女學校の上級生を招待しました爲に盛會でありました。同夜男女學生の集會に於て傳道集會に臨み、十一日の朝は同志社女學校の禮拜に於てロシアの事を訴へ、十一月十一日平和休戰記念の眞意を相共に考ふる好機會を與へられました。平安女學校は、青年會に好意を表されて居るので、早川校長に會見を求め、飢饉の救濟金を同校に於ても與へられん事を願ひました。

以上は青年會の外部的の活動を略報したのですが然らば精神上の方に何をなしつゝあるかと問に對し私共は多くの返事を持つて居ます。前述の如く祈禱週が十一月に參りますので、每日青年會のある所では、世界の地圖を開き諸國の婦人の爲祈り、獻金をし、又特別の宗教講演會を催して居ます。此際本部より、傳道の援助として幹事一人が上海に行く事は如何に青年會が此方面に留意して居るかを示して居るものです。人が此活動期に、各青年會で仕事が山ほどあり、本部では修養會場建築の募金手始めをなし、ロシアの爲五千圓を募らんとする際、何故支那に迄行く必要があるかと詰問する人に對して、女子青年會が宗教方面に重きを置き、是が其生命であるからだと返事をしたいのであります。

凡ての働に祝福のある事を感謝し、隱れたる友人が私共の爲に祈りつゝある力を一同に代つて感謝します。此稿を終えた時に橫濱より募金運動第一日をして二千七百圓集つたとの電話がかゝつて來ました

（十一月十五日上海出發の間際に當つて）

クリスマスの贈物

愛の贈物をする美しい習慣でいつもクリスマスをお祝ひする國に或る旅人が來た話があります。近くにある森がありましたがそれはクリスマスのお父様の所有で、毎年いろいろあらゆる種類の贈物を樹々にかけて居て下さるので皆の者は、クリスマスの晩に此森へ行つて樹から其贈物をとつて參つて居ました。旅人は皆が誰か人の爲に贈物を取るのだと聞きまして、何て馬鹿げた習慣でせう、もつと何とか改良出來ないものか知らんと思つたと申しました。人々は此旅人が大變賢い人だと思つたもので其人の言つたやうにしやうと決心し、翌年のクリスマスには自分の物丈取りに行く事になりました。けれども一人の少年は、どうしても贈物をし度いと思ふ跛者の妹が居ましたので、此規定に從ひませんでした。皆の者が參る時に彼も森へ行き、妹の爲に澤山の美しい贈物を見つけました。小供が彼に逢ひました時驚つくりしました。自分達は何も見つからなかつたのに此の少年は袋に一つぱい持つて居るのですもの、自分の爲に探してる者には何の贈物もなくたゞ跛者娘の住んでる小さな家、そこ丈にクリスマスの精神があつて眞に幸福でした。そこで人々は、人を幸福ならしめるものは受けた品物でなく、愛の心が、友達が好きそうな物を選ぶに到らしめる事を悟りました。クリスマス、神の愛し給ふ優しき御子の誕生日は、自分の事でなく、他人の上を考へるので、愛してる者達の心の喜びがある故に深い喜の時であると言ふ事が人々に知れました。

Christmas Gifts

There is a story that a stranger once came to a land where they always celebrated Christmas by the sweet custom of giving loving gifts. There was a forest near by that belonged to Father Christmas, who every year provided that the trees should be hung with gifts of all kinds, so that the people could go and pluck them on Christmas eve. When the stranger heard that everyone picked gifts for someone else, he said that he thought it was a very silly custom that could be changed to something better. The people thought the man was very wise so they decided to do as he said and the next Christmas everyone was to go out to get only things for himself. But one little boy did not obey the law because he had a little crippled sister to whom he felt he must give gifts, so when the other people went, he went too, and found many beautiful gifts for his sister. But the children met him and were astonished to see that he had a bag full when they had nothing, for there were no gifts for those who were seeking for themselves, and it was only the little house where the crippled girl lived that had in it the Christmas spirit and was really happy. And the people knew then, that it was not the thing that was received that made the happiness, but the loving thought that made a person select something that he thought the other would like. They found that Christmas, which was the birthday of a loving and tender Son of God, was a time of deep joy because of thinking of others and not of self, and because of the joy in the heart of those who love.

聖書研究

羅馬書講解（其七）

武本喜代藏

第七章

パウロは前章に主人と僕の例を引き、罪と律法の問題を論じたが、本章一より六迄の間に更に夫婦の例を上げて信者とキリストの關係を論じてゐる、婦とは人間を指し、夫は律法又はキリストである、信者も曾て律法と謂ふ夫の下にあつて仕へてゐたものだが、キリストを信ずるに及んで前の夫たる律法の束縛から免れた、キリストの十字架に依つて律法てふ夫は死んで了つた、それゆへ信者たる妻はモウそれに仕ふる必要がなく成つた、從つて他の夫たるキリストに嫁しても淫婦ではないのである。

此にパウロは律法の廢止を唱ふるのではない、信者はモハヤ其配下にゐないことを主張するのである人間が古い、肉的生活を營んでゐる間は、律法の僕であるが、一度キリストを信じて、彼の新婦と成るや否、律法てふ夫とは全然無關係に成つて了ふのである、我等はキリストと偕に死んだ、則彼と共に十字架に釘けられた、而して前夫たる律法と絶縁して「別人すなはち死より甦され給ひし者に適つた」ものである、新郎は死のバプテスマを受けて、そこから甦つた主である、從つて彼の新婦たる信者もキット一度は死なねばならぬ、則罪に死に、世に死ぬるのである、かくて律法てふ古い夫とは全く離れて新らしい夫則キリストにゆき、情意投合、愛の下垂る

るが如も交りに於て、神の爲に善果を結ぶのである子を產むのである。

　キリストを新郎に、信者を新婦に比して、互ひの濃き愛情と交りに於て、聖き果を結ぶてふことは基督敎徒の尤も深い、神秘的な經驗であつて、決して卑猥なことではない、性的當然である、信者は靈界に生き給ふキリストに嫁する迄決して果を結ばぬ、キリストを模範としたり、其人格を崇拜したりしてゐる間は靈と靈との密な接觸がない、從つて自分の品性の上にも、他人の靈の上にも何等の善果を生せないのであるが、一度彼の甦りを信じ、彼と近く靈的交接するに到つて不思議に自他に大なる善果を結ぶものである。

　我等が肉の配下に、肉の僕であつた時はキリストの靈ではなく、律法に囚れる罪の慾が我等の肢體に働いて、とんでもない惡い子を產んで、果を結んだに相違はないが、それは死の果であつた、則自分も死、人をも死に到らすやうな果を結んだのである、併し今則甦りの主に嫁した今日では之れ迄我等を束縛してゐた罪から死んで了つたから、モウ律法に縛ばられない、それから解放された、從つて儀文の舊き樣式にくゝられる必要がなく成つて、靈の新らしい樣式に由つて自由に、喜んで神に仕ふるやうに成つたと云ふのである。

　律法と儀文を最上善の如く信じてゐたユダヤ人に取つて以上五六節の如きパウロの所說は甚だしき不敬虔の言であつて、彼に對して憤怒の念を抱くに到つたのも無理ではなかつた、そこでパウロは七—十三迄に之を辯解し、律法が果して惡いのではない、罪が惡いのだ、律法は飽く迄聖いのだけれども人性の中に罪てふ恐ろしい力があつてその聖い律法や、誡を折りとして却て罪の觀念を刺戟し、勃發せしむるのだと論述した。

　彼は律法と罪の關係を說明すべく貪慾の一例を上げて論じた、七節には消極的に「律法に貪る勿れと云はざれば我貪慾の罪たるを識らざる也」と謂ひ、

更に八節には積極的に「罪は誡の機に乘りて我中の各樣の貪慾を起せり」と述べてゐる、則律法が來る迄罪の力は隱れてゐる、不活潑な狀態である、所が明白に貪る勿れと命せられると急に、俄然と其罪の力が働き出して、頻りに貪りたく成る、而して律法には實行の力がないから貪る勿れと命じた丈けで、其儘放棄して了ふ、そこで罪の力は何會釋なく其靈の上に縱橫に動き出して人格的大破壞を引起すやうに成つて來るのである。

「律法なくば罪は死ぬるものなり」で、律法の來る迄依然罪は存在してゐた、が併し丁度死んだやうにうぶな、不活動の狀態であつた、所が律法が來ると同時に罪は活きかへり、猛烈に、反抗的勢力を逞ふして我等を靈的に死なしむるに到つたのである、かくて人を生さん爲めの誡は人を永久の死に陷れるやうな悲むべき結果に成つて了つた、それは前にも云つたやうに、決して律法や誡が惡いとか、聖くないとか謂ふのでない、恐るべき人間の力が律法や誡を機會にして働き出し、荒れ出して遂に弱い人間を其虜にして了ふたからである。

十四以下二五迄の罪との苦戰、其失敗、無能の狀態を描くに付いては、パウロは自分の現在有りの儘の心的傾向を曝露したのであらうか、去りとも人類一般、特にユダヤ人全體を代表的に論じたものかとの議論が學者間に隨分八ケ間敷い、が併し要するにパウロ自身の過去の經驗を土臺として、人類一般の現狀に及んだもので、悔改する迄のパウロがパリサイの徒として律法に儼重であつた頃、如何に道德的に無力で「我が願ふ所のもの我これを行ず我が惡む所のもの我これを行ばなり」と云つたやうな狀態であつたかを述べ、引いて人類の全體、特にユダヤ人が全くかゝる無能無力の狀態であるかを描き出し、遂に「ア丶困苦人なる哉」と叫び、「是われらの主イエス、キリストなるが故に神に感謝す」との喜ぶべき救ひの實驗に及んだものであらう。

願ひは我が内にある、善を成さんとする意志はあ

る、神の律法を樂む心もないではない、が併し悲しい事には力がない、善しと思ひ、義しと信ずる事の實行力が缺けてゐる、それは律法にはない、誠にもない、彼等は冷酷な裁判人のやうに、我等に鞭を以て向つて來る「しか行ふべし」「しか行ふべからず」と、彼らは毫も我等の弱きに同情しない、少しも思ひやつて呉れない、只儼命するのみである、叱るのみである、若し從はなければ鞭ち、罰し、地獄に追ひやる丈けの役目しか持つてゐないのである。

此に靈界の花々しい戰爭が遺憾なく描かれてゐる敵は罪の力である、惡の法である、恐るべき大敵だ而して我てふ弱い一兵卒は幾度か勝利を求めつゝも又しても〳〵罪の囚虜と成つて了ふ、心の法は罪の法に征服される我が内なる人は神の律法を樂んでゐる、神の山に登らんとする、理想を追ふ、善を行はんと願ふのであるが、我が外に別の我則罪の法があつて何時しか我を縛つて動けなくしてしまふ、理想は高く、實行は出來ない、丁度跛者が高山を仰いで登らんとするやうに、心は矢猛けにあせつて見ても足が叶はず、涙を呑みつゝ、又しても〳〵引擦り下されて了ふのである。

此に到つて誰か「噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや」の嘆を發せぬものがあらうか、道德も修養ももうダメなのである何を持つて來ても救はれない、かくて初めてキリストの人格的救ひに導かれる、甦れる主、今も我等の爲めに祈り、裕かに聖靈を送つて、弱きを强め、汚れたるを聖化し玉ふ父の右に座し玉ふ主イエス、キリストを信じて、不思議の力を受け、靈火は燃へ、熱情は起り、多年敗亡、勝利の見込みのなかつた罪の奴隸も一朝忽焉として神の僕と成り、聖き事を成就するに到るのである、之れがどうして感謝せずにゐられるであらう。

英國の聖書學者モフアット氏は二三節の末に、直ちに「我みづから心にては神の法に習ひ肉にては罪の法に習ふなり」の一句を連結し、二五節の「是われらの主イエス、キリストなるが故に神に感謝す」で七章を終つてゐる、さう見れば文章の連結は如何にも明瞭である。

北の國より

齋藤庫三

「北の國より」「北の國より」と、
舊約の豫言者らは叫んでをる。
北の國、
そこは寒い、雪のふる、
食物の乏しい、
白熊の出る世界だ。

そこより、そこより、と
豫言者らは叫んでをる。
年中吹雪と、
あの恐しい荒れ狂ふ吹雪と、
光線の乏しい空、
淋しい松林の下の小さい家、

けれども、そこより、そこより、と
豫言者らは叫んでをる。

北の國

北の國、北の國。
そこは寒い雪のふる、
否むしろ吹雪の荒れ狂ふ、
とても人の住まはれそうもない、
そうだ、とても人の住まはれそうもない、
けれど、そこに美しい極光が、
無數の草花を、夏の日に、
彩を織りなした絨緞のやうに、
聲もなく音もなく、
照らしてゐるところだ。

北の國、北の國、
そこは寒い食物の乏しい、

松林の下に小さい小屋が、
淋しく立つてゐるところだ。
そうだ。淋しく立つてゐるところなのだ。
けれど、そこには美しい皮膚の少女が、
北の國でなければ見られない、
谷間のリリーのやうに、
紅の唇をして生れてゐるのだ。

北の國、北の國、
そこは山や海が寒い形をして、
人氣もなさそうなところだが、
そうだ、そこは人氣もなさそうなところだが、
神はそこに、斧をかついで、
獸の皮をきて、獵に歩く、
髭むぢやな、慓悍な、頑丈な人を、
南下の用意に立てかけて置くところなのだ。

少女之欄

ベニイのクリスマス

村岡花子

ベニイはやつと七歳の子供でした。而も年よりはずつと小柄でした。それも其の筈、終日何も食べずに暮す事は珍らしくもない上に、食べた所で、其の食物は子供の身體を丈夫に肥らせるやうな物は一つもありませんでした。

ベニイのおつかさんは死んで仕舞つて居りましたし、父親と言つたら、家に居る時は大抵お酒に醉ひつぶれて馬鹿のやうになつてました。斯ういふわけで、ベニイはつまり父親の酒代を作る爲めに、マッチだの、靴紐だの、鉛筆だのといふ物を賣つてお金儲けをしなければなりませんでした。

何だかお話が大變に悲しくなりましたが、これは初め丈けで、終はみんな樂しくなりますから、どう

ぞ沈まずにお讀み下さい。何もかもベニイの爲めに都合よくなるといふ事丈けをおぼえてゐらしつて下さい。

丁度クリスマスの前の夜でした。ベニイは朝から終日父親の歸りを待つて居りました。どうぞお酒の氣なしで歸つて來て、マッチだの其の他の賣物を買込んで自分が商賣が出來る丈けのお金を持つて來て呉れるやうにと一生懸命に考へて居りました。

クリスマスの時節には人がみんな親切になりますので、ベニイもお菓子の一つ位は買つて食べられる位の餘分の儲をする事が出來たのです。

けれどもいよ〳〵お日樣が沈みかけた時には、もう駄目だ、歸つては來ないとわかりました。それでベニイは仕方なくぼろ〳〵に破れたコートの中に紙を入れて、風の吹き込むのが少しはよくなるやうにし、靴の穴にも紙を詰めて、扨てそれから賑やかな町へ出て行きました。

ベニイは一杯に飾附けた窓の中をのぞき込んで、お菓子だのお煎餅だのを眺めては、自分にもお金が有つたら、あれを買はう、これを買はうなどゝ想像してみたり、靴や、温かさうなコートやらを見ては心の中で自分に温かい、新しい着物を着せて居りました。

生れてから未だ一度も玩具といふ物を持つた事のないベニイは、ほんたうに自分に必要の物の他は何も欲しいといふ氣は起りませんでした。

其處へお菓子屋の店から主人が出て來て、町の左右を頻に眺めて居りましたが、ベニイに見附けて「オイ此の籠をあそこの角まで持つてつて呉れりやパンを二つ駄賃にやるよ。」と言ひました。

ベニイは御馳走に有附けると思ふと元氣が出て來まして、お菓子屋さんから町の名と番地を聞くや否や籠を持つて馳け出しました。

其處の家の料理番は戸を開けて見ると、ぼろ〳〵の着物で半分凍えて居るベニイが立つて居りましたので、「まあ中へ入つて、少し温まつておいで。半分

凍えかゝつて居るやうぢやないか。」

「でも歸らなけりやなりません。パンを二つ貰ふ事になつてゐますから。」

親切な料理番はベニイの言葉なんかは聞きませんでした。臺所の中へベニイを引ずり込むやうにして入れて、せつせとストーブの前に座らせて、フーフー息の出て居るスープをベニイの手に持たせました

熱いスープで身體が温まるにつれて、パンの事はベニイの頭からぬけて仕舞ひました。料理番はベニイの側で色々と尋ねて間もなくすつかり其の悲しい身上を知つて仕舞ひました。

「可哀想にねえ！　ほんとに何ていふおとつさんだらう。此處んとこへ連れて來て、思ひつきりひつぱたいてやり度いやうだよ。二階ぢや可哀想な奥様がお坊ちやまをなくして眼も何も泣きつぶしてゐらつしやるぢやないか。親の心といふものは然ういふものだのにねえ。」

料理番の小母さんは此處で言葉を切りました。何だか、眼が樂しさうに光つて來ました。

「ちよいと此處に座つて待つておいで。直ぐに歸つて來るからね。」と言つて臺所から出て行きました。

二三分すると、今度は眼を眞赤に泣きはらした綺麗な奥様らしい人と一緒に戻つて來ました。

「父親つていふのがまるつきり世話をしないんださうです。可哀想に、やせこけた顏をして居りますでせう、ひもじくてひもじくて堪らないんでございますよ。此の着物と言つたらぼろ〳〵の穴だらけでさほんとに何ていふ事でございませね、奥様。」

「あの子の着物が丁度合ふだらうよ。お前、この子にあれを着せて、すつかり綺麗にして呉れないかい。」

と言つた時、奥様の口元はブル〳〵震へて居りました。

「ようございますとも、見てゐらしつて御覽なさい。風呂を使はせて、温い着物を着せてやりませう。」

ちよつとの間に、料理番はベニイの身體からすつ

かり垢をこすり落して、着物を着替へさせて、もう〳〵さつきのお菓子屋の所へパンを取りに歸つても迚も呉れさうもなくベニイは見違へるやうになりました。

「もう少し肥つて居たら、坊ちやまにそつくりだ。」と言つて料理番はベニイを眺めました。

「さあ、奥樣の所へ行かう。」

　奥樣は死んだ子供の着物を着たベニイを見ると、顔に手を當てゝ泣き出して仕舞ひましたので、ベニイも悲しくて一緒に泣き出して仕舞ひました。

「奥樣、泣かないで下さい。わるけりや私は此の着物を脱ぎます。」と言つて、ベニイに奥樣の腕に手を掛けて慰めます。

　奥樣は顔から手を離して、ベニイを抱き上げて、顔にキッスをしました。

　何時の間にか、此の家の御主人が來て、奥樣の側に立つて居ました。

「此の子にクリスマスをしてやつたら如何だい？　其の方が一日立てば枯れちまふやうな花を墓へ一杯に飾るよりよかないかい？　其の方が坊やだつても喜ぶかも知れないよ。」

　奥樣は又ベニイを抱いて泣きましたが、やがて涙を拭いて笑ひました。「然うですわね。坊やの紀念ととして、此の子を喜ばせてやりませう。あの子を紀念するのには一番それが良い方法でせうよ、私がこんなに泣いて居るのを見たら、どんなに坊やはつらがるかも知れませんわね。」

　其の晩ベニイは生れて始めての柔い、温いベッドに眠りました。翌日になつて、これも今迄に夢にも見た事のないやうな立派な朝御飯の後で、邸の一番上の部屋へ連れて行かれました。見れば其處には店の窓で見た通りのクリスマスツリーが立つて居りました。其上の贈物はみんなベニイの物だつたのです

　それは遊戯部屋でしたから、玩具が一杯でしたがベニイは遊び方を知りませんので、ぼんやり立つて居りました。

クリスマスの贈物に新年の讀物に

著譯者	書名	判型	頁數	定價・送料	版	內容
時事の少年少女主幹 安倍季雄著	愛のふるさと	四六判 上製	三五二頁 五號カナ付 木判五枚入	定價 一円・七〇 送料 ・一〇	新刊	親子の情、皇室と國民の關係、人に事ふる道、友情、誠意の勝利等を內容とせる、少女の健全なる讀物十二篇を收む
石黒忠悳序 松尾孝輔著	ナイチンゲイル物語	四六判 上製	二〇〇頁 五號カナ付	定價 一・二一 送料 ・〇六	第二版	愛の權化たる彼女の一生を傳し謙讓の美德を敎ふ
植村正久著	祈の生活	四六判 上製	三一三頁 五號カナ付	定價 一・五〇 送料 ・一〇	第五版	志と信仰、詩百三十九、信仰發展の次第、祈の研究、主の祈、祈禱の題目等十八篇を收む
植村正久序 高橋信太郎解	ペテロ前書研究	四六判 上製	一三二頁 五號カナ付	定價 一・〇〇 送料 ・〇六	新刊	解者が心血を注ぎたる研究 日本基督者の處世訓
植村正久序 齋藤勇譯	宗敎詩 聖パウロ	四六判 上製	一七四頁 天金淸楚	定價 一・〇〇 送料 ・〇六	第四版	マイアズの傑作セント・パウロの譯書 卷頭寫眞 マイアズ
菱沼東洲譯	ミルトン コウマス	小形 上製	一八二頁 ポイント字 假名付	定價 一・〇〇 送料 ・〇六	第三版	處女の貞操と惡魔の誘惑を主材とせる金玉の劇詩 卷頭寫眞 ミルトン
櫻井鷗村著	リンコーン物語	縮刷 上製	五二四頁 ポイント字	定價 一・七〇 送料 ・〇八	十五版	邦文に成れる、アブラハム・リンコーン傳の白眉、青年無比の讀物
松尾孝輔 土屋巴 譯	哲人エマースン	四六判 上製	四二〇頁 ポイント字	定價 二・三〇 送料 ・一〇	新刊	米國を淨化せる、コンコのドの聖人、エマースンー傳記

發行所

東京市麴町三丁目
振替東京七八四七

丁未（ていび）出版社

電話九段六六〇
出版書目進呈

けれども御主人夫婦が馬に乘つて見せたり、一緒に遊んだりして下さいましたので、直ぐに覺えて仕舞ひました。ベニイはまるで夢を見てゐるやうな氣持でした。

時々奥様と顔を見合せますと、涙の中から笑つて居るのがベニイの眼に入りました。其の度に奥様はベニイにキッスをしますので、それが夢でないといふ事がわかりました。

夕方に近づいてから、ベニイは御主人夫婦と自働車で、自分の元住んで居た所へ行きました。

ベニイは心配で寒くなるやうな氣がしました。

「あゝもうみんなお仕舞だ。又元の所へ歸るんだ。」

とベニイに考へて居たのです。けれども未だ温い着物は自分の身に附いて居りますので、それをしつかりと抱きしめるやうにして、こんなに温い物が着られるなら、生きてゐるのもあんまり厭でもないと思ひました。御主人夫婦はベニイを離しませんでした

唯ベニイの父親の事を調べに來たのでした。

仕合にも、ベニイの父親だと思つて居たのはほんたうの親ではなかつたので、ベニイは新しく此の立派な夫婦の養子になる事が出來ました。

ベニイはこんなに仕合せな身分になりましたが、料理番の小母樣を忘れませんでした。

何もかも此の小母さんのお蔭だつたのですから、泥足で家の中へ入つて來たり、臺所でお菓子を食べて屑を落したり、其の他どんな事でも小母さんを困らせるやうな事は決してしませんでした。

ベニイは立派な人に成長して、ベニイの恩人達を喜ばせました。けれども、クリスマスの時にはきつと子供を喜ばせる事を忘れませんでした。自分も一度は貧乏で、淋しいクリスマスを迎へて居た時に、食物と家とを與へられた事を覺えて居たのです。

ベニイは毎年クリスマスには手袋や靴や色々の物を買つて、貧乏な子供に贈り、それで自分に親切だつた人達を記念して居ります。

——From "Sandman Christmas Stories"——



短歌

中野てい

蜘蛛の巣にさくら一葉わなゝきて播目しろしはつしもの朝

霜の朝管絃樂(オーケストラ)の序のさまにあけてゆくなり靜なるかも

二つやりて二つ殘りし猫の子に鈴つけてやる晝のひとゝき

ゆるされていとかそけくも冬の日を石垣に咲く乳草のはな

戀に似て憤怒にも似て不可思議のちから覺ゆる魂の底

白六つ赤はひとつの勝負なり赤勝つことをわれは祈りし

そのかみの光知らねど夜々の星のまたゝきたふとしと思ふ

會堂に人の祈れば聖きもの降る心地し涙こぼれぬ

くろき畑土

前田河咲子

くるしかり腹立たしかりかなしかり人のうつゝのいのちさびしき

かくばかりくるしきゆゑにこのいのちいとしと泣きてわれ獨り語つ

秋ばれのつづけるのちの曇り日のおちつきあるをなつかしみけり

秋わかき岬の山のうすあかき夕陽も失せて一と日暮れけり

ポプラの葉おもひに歎きつさゆらげば海の音さへ秋となりぬる

庭に來てけけふも餌あさる鷄の親子づれゆゑつひに追はざり

くろぐろと犂きかへしたる畑土に秋はあかるくなりにけるかも
生けるものに手を觸るごとく觸れてみぬ犂きかへしたるくろき畑土

折にふれて

後藤よし香

此まゝにたゞこのまゝにいのらましいとしつけさにしたみ入る夕
何事も神のおん手にまかせてとひたにおもへとさびしかりけり
ちち色のりんごのみをは見入りつる我子のひとみかゞやきてあり
つらかりし心と心のたたかひを打ちいたきつゝ秋の陽を見る
芝草はすこしきはみてさ庭邊のささん花さきて秋の陽てれり

井の頭にて　（三首）

靜寂は水の底より起りきてわか胸にしもひたとせまり來
いく千の謎をはひめて水底に藻草は多く生ひてありけり
ささ波も得たゝす水のおもはたゝ紺靑のいろふかうして

別後

けい子

百萬のよろこびの來て誘ふとも胸を出でざり今の淋しさ
原へ、原へ、何のまてるか知らねども心ひたはす野に出でむかな
故知らず涙の出づるかなしさよ聲はりあげて歌うたへど
力なく秋の夕日のしづみたる野末にまよふわが想ひかな

十一月十一日　日比谷公園にて開かれし平和記念日に澁澤氏は「世界人類の共通の利を計る經濟道德一致を平和の基とすることを絶叫する」と述べられた。

うたへるマリア

村岸榮子

ルカ一、四六—五六

新約書に綴れたイエス降誕のさまは稀に見る纖細な筆致であつて、典外聖書に現れたそれと比較すると、際立つて單純にしかも愼重に描れて居るのである。こゝにしばらくマリアの俤を描くにあたつて我々は、第三記者の錄した一篇を繙くのである。

うら若きをとめ、鄙育ちの十七八になつた許りで疾くより村の一大工と婚約中の、そして恐らく近い將來に實現せらるべき彼女自身のホームの營みを多く夢見て居たに相違なかつたつゝましやかな、思慮深い、はにかみ娘マリア、彼女は、猶太人の聖書に精通し、その同族の人々と同じく救世主の降臨をひたすらに待ち侘びた一人であつた。さればユダヤの娘達が一齊に祈願して居つた如くに、彼女も亦かゝる祝福をその國民に、はたまた全世界に迄及ぼすべき導管となつた事を祈念して居たのは疑ひないのであつた。

かゝる中に彼女のみ只一人エバの娘等の中より選ばれて、この名譽を擔ふに價値ある、世の救主の母たる有格者に擧げられたといふ事は、彼女の人格に捧げられた最大のはなむけであらねばならなかつた「女の中にて爾は福なる者なり」この言葉は眞理であつた、然しこの樣な祝福と榮譽と受ける爲めに彼女は、一般の母親が拂ふものにまさつてずつと高價なものを拂はねばならなかつた。老齡なるシメオンの唇より洩れた「劍爾の心を刺し通さう」の一語は

この時既に彼女に當つて居つたのであつた。何故ならもはやナザレの一大工との婚約は衆知のところ、約婚の誓ひに背くものは結婚の誓の破棄者と同じく死罪を負はれねばならなかつたのであるから。まことにをとめマリアは、匂やかな純白の花に咲き出たのであつたが、今あらたに遷されたこの境界には驚愕すべき恐怖すべき多くの理由があるのであつた。

　婚約中の愛人であればある丈けに一層、かゝる事柄は愛人に洩らすべくもあらず、さりとてまた家族の中にも彼女の心を語るべき人はなかつた樣である是より推して見るに彼女自身の母は既に亡かつたのであるか、さもなくばその母は我子の深い秘め事を明かさるゝに足る丈の情味を所有しなかつたのであつたか、とにかく聖書はまつたく無言である。然し乍ら處女マリアがこの危機に際して、誰人か有情の友と相觸れて慰められ、力附けられ、よき口添を得ねば止まぬ感じを抱いて居つたのは明白である。

　これを裏書きするものは彼女の近親、エリザベツ夫人をたづねての訪問旅行であつた。行程四日、ナザレの南方百哩のヘブロン邑まで徒歩を續けやうといふのである。危險の多いその土地を、マリアが單身出懸ける事は、非常な冒險であつた。然し「どうしても行かねばならない、ヘブロンまでどうしても」この確心は遂に、如何なる危險をも困難をも埒外に一掃し去つて了つたのである。

　此の旅行に關して我々は何も知る處はないのであるが、歴史にも文學にも精通した彼女であつて見れば必ずや過ぎ行く邑々と、其の處にかつて起つた事件や人物とを思ひ起しつゝ、冥想の歩みを運んだ事であつたらう。サラ、ラケル、ハンナ●デボラ●サムソンの母、ルツ、その他幾多舊約婦人の俤は、ナザレよりヘブロン迄、マリアの同伴者となつたのであるキションの河を渡れば想ひは自づとデボラとイスラエルの爲めに盡した事業の上に走り、橄欖の丘を上りつゝあれば彼女は、國民生活の中心である聖き邑エルサレムを望み、また國民希望の表徴である神殿

を仰ぎ見たであらう。けれども將して彼女はこの邑の罪と歎きとを思ひ環して、此處で再び胸刺さるゝ如くに思ひ到つたであらうか。

或はまたユーフラテへの道すがのラケルの墓前に疲れを休まするとき、彼女の胸に浮んで來るものは遊伎ラケルの悲劇的終焉と、彼女が新生活に入らんとして如何に貴い價を拂つたであらうといふ事であつた。そして今や同じ事を經驗しつゝあるマリアにとつて、ラケルは何たるなつかしい涙ぐましい先輩であつたゞらう。更にベツレヘムの野を過ぎれば其處は彼女の家系に關する歴史の多くある所、然し彼女は偉大なる祖先ダビデの偉業を思ふよりも、後にこのダビデを興すに到つた異邦のをとめルツを忍び神、卑賤より引き上げ給ふた母ルツの幸福に感激するのであつた。歩調はゆるやかに運んだ。到る所自然はマリアの歎賞の眼を以て迎へられ、その奥にかつて生きた人々の俤は、悉く彼女の胸に甦り來るのであつた。

印象深い四日の旅裝を解いた後、ヘブロンのさゝやかな家庭の中に起つた二人の敬虔な伯母と姪との神秘深い交りの帷を、強いて擧げ樣とするはあまりに心なきわざである。が、エリザベツの奏でる言語の賦がマリアの心の琴線に觸れて三ケ月の此の滯在がイエスの母に大きな力となつた一事は確かな事實であつた。また二人の女性が靈的に向上した、聖靈の誘導を受けた狀態にあつた事も疑ひなき事實で、故に彼等の會話は詩的な、豫言めいた形式に出たのであつた。

エリサベツがマリアを正しき主の使女と認めた時に挨拶したといふルカの記述による言語は、悉く彼女の深い感動を現したものである。「聖靈に滿され大聲で叫んだ、」かういふ纖細な處を描寫して居る彼ルカは、恐らくは後年この一書を錄するにあたつてマリアより醫師たるの故を以て特に詳細に聽取したのであらうと思はれる。

マリアが最初て天使の告ぐるをナザレ村で聽いた

時の光景と、今や此處へブロンで崇高なる情感高まり、所謂マグニフイカツトなる頌への歌がその唇を衝いて出で來つた、この二つの狀景より我等はいかばかり美しい靈感に滿ちた彼の肖像を描き得る事だらう。見よ我は主のつかひめ、凡てみむねのまゝに」――主に榮光を來しその選民に祝福を齎せる爲めに一身を供へんとする、何たる稀有な信仰と從順なる精神であらう。天使の來訪に驚愕したマリアは然しサラの如くに不信の冷笑を酬ひなかつた、またザカリアの如くに疑問の質問を發しなかつた。けれども彼女は困惑した、何と答ふべきを知らなかつたこは彼女のやうな年若い處女にとつては當然の事で實はその搖ぎなき信仰の前には、疑惑も恐怖もなかつたのであつた。

試みに彼女のマグニフイカツトを繙いて見るに我々はその偉大なる純潔と、謙讓と、生の淨化とに吃驚するのである。然るに或る者は是を低價して言ふ、まつたく獨創を缺き、悉く詩篇とハンナの歌よりの引句であると。まことにそれはさうなのである。全思想、そして殆んど全句に到るまでヘブライ聖書のいづれかに引照せらるゝのであるから。

さりながら最大の主要點はこれら多くの引照句が彼女によつて纏められてその頌榮と感銘とを表現する一つの告白文に作り上げられた處にあるので、この歌は處女自らの純潔と謙讓と淨化の精神の表現であると見らるゝのである。「惡をなす者は光を憎んで光に來らず」との語の通りに、心の潔き者のみが神に近くある事を喜ぶのである、然るに聖ペテロの如き善人ですらも時にイエスの聖き榮光にうたれて、「離れて下さい、私は罪人ですから」と叫ばざるを得なかつた。勿論マリアは罪なきものではなかつた彼女自らも是をこゝに表明して居る位であるが、然し何等主の追求する所の光に怖れ、隱すべき物を持たなかつたのである。さればこそ彼女は歌ひ、言ひ得た。「我心主を崇め、我靈は我救主なる神を喜ぶ」と。次に彼女はまた歌ふ「この使女の卑徵をも眷顧

たまふ」萬感全くこの一句に盡きて彼女は自己を卑下し、稚子の如き驚異を以て、神のめぐみを待つたのである。更に彼女は言ふ、「今より後萬世迄も我を幸なる者を稱ふべし。」その幸福とは決して彼女自身の幸福を指すのではなく、たゞ彼女が自他のために祝福の道を開き、且つは女性の上に蒙らされたる汚辱を除去するのよすがたる故に幸福なる者と稱へらるゝのである。彼女こそは、げに新約のエバであり光明と生命の君の母であり、世の母達の母なのである。

彼女の頌への聲はいよいよ高調に達してイスラエルの神の至尊、至聖、至善を賞め歌ひ、その約束を果し給ふに遲からざる神は「アブラハムとその子孫を窮なく憐れむ事を忘れ給はず」と結んで居るのである。

かくてマリアは三ケ月間、即ち彼女自身の愛子の先驅者に選ばれた赤子の出生する迄ヘブロンに滯在したのであつた。そして此の事實に依て更に確信と力とを得てナザレへ戻つたのである。

我々は屢々聖書が無言である事に物足りなさを感ずる者であるが（たとへばイエスのエマオ途上の會話の如き）こゝには全くそれに反對にむしろなくもがなと願はるゝ記錄が、マリアのナザレへ歸つた後の樣を敍して居るのである。彼女の純なる胸には以前にも增して銳い劍が突き通されたのである。けれども彼女に苦い批評を加へた婦人達や婚約者のヨセフやを、當時のナザレ慣習よりすればあながちに責めるわけには行かないのである。まして三ケ月の不在は更に不利な疑惑の色彩を濃厚ならしめたのであつた。我々はこの暗き日の處女マリアを思ひ見れば彼女は頭上に畫工の冠らしめる光明と榮光の光輪の代りに悲しみの影を曳ける心地するのである。彼女は誤解せられた、婚約の誓を破り放縱な生活を送つたと定評せられ、名譽も德も傷けられたのだ、まことに彼女は悲しみの冠をかうむらされたのであつたかうした彼女の苦い經驗が期せずして愛子イエスに

傳統せられ、彼をして悲しみの人たらしめる傾向を多分に與へたものではなかつたらうか。このゲッセマネの苦難が幾日續いたか、それは記されては居らないけれど、公明正大な端嚴なヨセフをして、凡てを了解しマリアを妻とするに逡巡せぬ迄に悦服せしめるには、特別な神との交通があつたに相違ない。

この時代のマリアの性格を窮ふに足る二つの興味ある辭句に就て、我等はいま暫く數言を費さう。彼女の愛兒が出生した後羊飼等は拜さん爲めに上り來り、そのありし事どもを奇しみつゝ人に語り傳へたので、聽く者は皆驚き奇しんだのであるが、マリアはひとり「凡て是等の事を心にとめて思ひめぐらした」のであつた。彼女は是等の事を口にしなかつた論爭しなかつた、ヨセフにさへ多くを語らなかつたたゞ心にとめて是を思ひめぐらしつゝ、靜にその意を覺らうとしたのであつた。

我々は一つ肖像を鑑識するに當つて、その見點を定める事が如何に重要であるかを熟知して居るが、今こゝに掲げた一句は處女マリアを描寫せんとするに正しい見點と角度とを與へるものであるのであるこれより後少年イエスが兩親と共にエルサレムへ初上洛してラビと共に問答をして居つた際、彼が當然天父の家にあつて天父の業をつとめて居る事をその母が知つて居なかつた事に驚いた時に、再びこの意味深淵な言句が引かれて居るのである。「母、すべて是等の事を心にとめぬ。」

これらよりして我々は初期のマリアが、物ごし靜かな思慮深い愼しやかな秘密性に富んだ、そして未來に關し、その子に就て言はれた事柄に關し、また或は神殿で或は家にあつてこの子に依て語られた神秘に關し、驚異を感じ、冥想に耽つた女性であつた事を知るのである。子なるイエスより發せらるゝ質問に依て彼女がシメオンの豫言した刃で胸を刺し透さるゝが如くに感ぜしめられる事は屢々だつたのである。

期待

森美樹子

春子は、其の年の春に學校を終つて、後は田舎の家で、無事に何の苦も知らずに暮して居た。

春子の特にいちじるしかつたのは、『母親程、春子に取つて善い人はない』といふ、信頼の深かつた事である。其の母親は、温厚な情味の豐かな人であつた。そして、その信心深い日頃の態度は確かに、彼の女の人格を事實以上に高めて居た。猶又、迷信といつて笑はれるのも省みず、神佛に祈願を籠めて居た。其の同情深い常の生活は、彼の女の周圍の人々に親しみを強くさせたのである。さういふ母親を持つた子には、何物と比べ様とも、此の母の愛が溢れて居る其の事だけが、優れて偉大の樣に思はれて居た。春子は、何を措いても嬉しいのは、善い母を持つて居る事だけであつたから、春子の色々な問題は母親を離して考へる事が出來ない程、熱烈であつたのである。

春子は、此の母と一所に田舎に居て、何か村の子供の爲になる樣な仕事に取り掛りたいと思つて居た其の年の夏であつた。春子の母は僅、三日間床に就いて、重い病氣の爲めに世を去つた。春子は自分が二十歳近くになる今日迄、そんな不祥な事は夢にも思つた事がなかつた。實に以外の出來事であつた。斯んな恐しい場面に出遇はさうとは想像だにした事はなかつた、春子は此の驚きを受けて、これに耐へるだけの心の用意が全く欠けて居た。眞逆樣に谷底に蹴落されたやうで、たゞもう、茫然としてあたり

が眞つくら暗になつてしまつた。春子には父が居ても、兄弟が居ても、たゞ母有る斗りであつた。今、母といふ燈火を取り去られて仕舞つた春子は前後左右身動きも出來ない程の心細さを感じたのである。

然しさうした心持は單に春子ばかりては無かつたらしい。家の中は、春子自身の放心、その父の惜愛その兄弟の混亂、弟達の物足りなさ、召使の歎聲、斯ういふ氣分が入り交つて、悲慘な時日がだん／＼に經つて行つた、今日は四十九日、今日は百ケ日といふ様に佛事を營んだり。母の居ない爲にみんなが馴れない心づかひをしたり、殊に痛ましく見える父親の姿を眼前に見せられて、弱り切つた空虚な春子の心は堪へ切れない程の刺戟を受けた。

春子の家では毎日、題目を稱へ、太鼓を叩き、拍子木をうつた。そして大人も子供も自我偈といふ經を暗誦した。又春子の兄弟は經文を寫したり刻んだりした。佛壇には夜も晝も線香と燈明の絶える間が無い程であつた。家中の者が斯うする事は、春子の母に對する、執着――愛のありつたけを盡したつもりであつたのだ。その果はみんながだん／＼痩せて疲れて、顔の艶も衰へ來たのである。春子も此の間にあつてだん／＼感情の平靜は失はれて來るし、たよりない心持を自分ではどうする事も出來なかつた

母なき家庭の悲慘な有樣を眺めながら、春子はこんな事をも思はずには居られなかつた。

『家の者は誰だつてお母樣をお思へばこそ毎日々々會向三昧に暮して居る。この樣に一心に思ふ眞心を、お母さんはさぞ喜んで下さる事であらう。けれども私共はこれだけで既う充分なのでせうか私共はこれで一ぱいのつもりで居ても、お母さんにはもつと大きな志と願ひとを持つていらつしやるかも知れない。そして、お母さんも、そんな事を言ひ置く暇もなくあはたゞしく、お亡くなりになつたのであらう。慥かに言ひ忘れた事がおありになるに違ひない。して見れば、他の兄弟もそれぞれの考慮がある事でせう。がさしあたり私だけは

どうしてお母さんの言ひ忘れていらつしたことを尋ね出したらいゝでせうか。」

暗黒な心の中に何だか少し動き始めたものがある手ごたへのある或るものが解れる樣に春子には思はれて來た。

『何しろ、このまゝで居ては仕方がない。――けれども、どうしたらよいのかそれは私には解らない』

漸く縺れた糸の糸口を探しあてた樣に、春子は生前の母の愛を端緒として何か解決を求めなければならぬ樣になつて來た。

（二）

春子の切に願ふ處は母と一所に亡き人の數に入る事であつた。死を望む春子の心は冷やかになつて居た。そして生きんとる人々の生活の軋りが煩はしかつた。それのみでなく、鳥が鳴かうが、花が咲かうが、春子には全く沒交渉になて仕舞つたのである。面白さうに話し合つて居る健全な人のめまぐるしい生活狀態が不思議でたまらなかつた。その上、親の死位で春子の樣に落膽したり、惱んだりする事はあんまり仰山であると、人々から思はれて居る事も春子にはよく感じられて居た。これが又春子には悲哀の種となつた。そして世に在る事がいよ〳〵厭はしくなつた。寂しくやる瀬なき春子は、先づ人に遇ふ事を避けて一室に籠るばかりであつた。經文を讀み題目を稱へて、戀しき母の死を一圖にみつめ、謎の樣な人世を注意深くながめる事になつた春子は、死ぬにも死なれぬ惱みを持つて日を過した。

錦の樣に美しくなる山の紅葉を仰ぎ見もせず、月に心を遣る事もなく、徒らに秋を送り、冬の初めになつても、弱り果てた春子の身心は、さつぱりとした事がない。そして息をする屍にも等しくなつて、春子は遂に床に横たはる事だけが、日課になつて仕舞つた。

優ぐれた人に敎を受ける事もなくて、たゞさびしい、やるせない心の反覆へされる春子の思索は、春子を自滅の方向へ導いたのである。

(三)

其の頃、春子の親類から寄寓して居た、一人のお婆さんが居た。春子とは親しい友達であつた。今日もお婆さんは春子の部屋を訪ねた。お婆さんは榮子といふ名である。

榮『春子さん!! 又寢ていらつしやるの?』

春『エー、起きて何を仕樣といふ張合もないものですから……』

榮『それは御むりもない、けれども、あなた氣を取り直して起きて御覽なさいよ。そして平常御好きなお琴でも御しらべになつて御覽なさいな』

春『もう聞いて吳れる母が居ないんですから彈く氣にもなれませんわ』

榮『だつてね春さん!!、お父さんの御心も察してあげたら、も少ししつかり御出來になれるでせう? お琴でなくても、何か氣を引き立てる樣なお稽古でもなさつたらいゝのね』

春『何を致しますにもこれからはなか〳〵大變でせうと思ひます。母が居ました頃は、いろ〳〵氣を付けてくれましたから少しばかりづゝ習ふ事も出來ましたがこれから難かしくなる事と思ひます。』

榮『それならせめて御覺えになつたものだけでも忘れない樣に遊ばしたらいかゞ?。それがお母さんへの孝行におなりになるのでせう?』

春『……………』

榮『ほんとうにどう御慰めしていゝか困りますわ。斯ういふ時に春さんがキリストを信じていらつしやれば、お母樣との御別れがたゞの御別れではなくつて、神樣の深い御めぐみによるのだといふ事がおわかりになるのですけれどもね……』

春『春子は何の返事もなく、床の中で淚を拭つて居た。

榮子は五十を越して居たが、その心の持ち方は他の年寄とは大分變つてしつかりして居た。切り下げにした髮の毛は眞白で艶があつた。春子の家では榮子も家族同樣にはして居るが、榮子の身になつて見

るとなか／＼氣苦勞が多かつたらしい。殊に病身で絶えず藥に親しんで居たのであるから、その不自由も人知れず味つて居たらしい。

榮『こういふ時には春さんにも信者の善いお友達があるといゝのね……私共年寄りですけれど、希望會といふのがありましてね、慰め合つたり、聖書の御話を伺つたりいたしますの、そして私の樣に教會を離れて居るものゝ爲めに祈つて下さるので私はどの位力強いかわかりません。』

春『私慰めて頂くよりか、誰も居ない處で、思ふ存分、母の事を考へて見たいんですの。』

春子が拒絶するまゝに、榮子は話す事をかへて、火鉢にかざした左の甲を右の手でさすりながら、その上に目を落した。二人の間には、少時沈默が續きむせぶ溪流の響、鐵瓶の音が、靜に通つて居た。榮子は春子を慰める爲めのクリスマスの贈物の事を考へながら淑やかに障子の外に出て、硝子戸越しに向ふ山を見た。午に近い太陽が赫々と當つて、山蔭の此の家から温さうに眺められた。(つゞく)

會計報告

御寄附金

金貳圓也(維持費一口第一回御拂込)	横澤つぎ氏
金拾貳圓也(同上一口御拂込)	ミス、デントン
金拾貳圓也(同上)	山田千代子氏
金六圓也(同上下半期分)	長谷川喜多子氏
金參圓也(同上三ヶ月分)	淺井治子氏
金五圓也(維持費五口十一月分)	松岡鐵枝氏
金壹百圓也(負擔金として)	東京女子青年會
金拾圓也(同上)	横濱女子青年會
金貳拾圓也(同上)	プール女學校青年會
金拾貳圓也(同上)	東洋英和青年會
金拾圓也(岡崎氏講演謝禮として)	捜眞女學校
金貳拾五圓也(御寄附)	河井道子氏
金五拾圓也(同上)	ミス、デントン
金參圓也(同上)	土井澤江氏

特別會計

ロシヤ飢饉救濟の爲(自十月廿五日至十一月二十日)

金拾貳圓拾錢也	無名氏

金貳拾圓也	河井道子氏
金六圓六拾五錢也	日本女子大學有志
金五圓也	水納氏
金拾圓也	渡邊すみ子氏
金五圓也	朝倉高等女學校
金壹圓也	荒井とく氏
金拾圓也	武藤久江氏
金四圓也	篠山高等女學校
金貳拾九圓也	福島高等女學校
金六圓也	新發田工藝女學校
金貳圓五拾錢也	横山マサ子氏
金拾七圓也	京都女子靑年會
金拾五圓也	野村美智子氏
金參圓也	古市靜子氏
金五圓也	松岡鐵枝氏
金拾五圓也	渡邊千菊氏
金壹圓也	荒川シゲ子氏
金拾圓六拾七錢也	日本メソヂスト大分教會
金拾四圓也	四谷バプテスト教會
金拾四圓四拾錢也	熊本尙絅女學校
金參圓拾錢也	仙臺バプテスト教會
金五圓四拾四錢也	鹿兒島高等女學校

合計　貳百拾四圓五拾錢也

この稿〆切にあたり遺愛女學校よりロシヤの爲九百五十九圓を送金の旨報あり感謝に堪へず

修養會建物の爲

金百圓也	神戸女子靑年會
金五拾圓也	鹽谷秋代子氏

東京基督教女子靑年會報告

一般部、十一月十日(金)午前十時より午後四時迄小供洋服正式着方及展覽會を二階に、英國毛糸販賣を下の體操場で開く、秋雨の冷たい日であつたが百五六十名の入場者があつた。毛糸の賣行もよく、二階の室では奥様方の心に非常な満足を與へた樣々の洋服が並べられてあつた、特に赤ちやんの入浴の實地は見て居られる方々に最もと肯づかれた。

十二月二十一日午後六時クリスマス祝賀會

同二十四日午後二時クリスマス禮拜の豫定、同日午後三時半より四時半迄日比谷公園音樂堂で市民クリスマス祝賀會を擧行いたし、太聖歌大コーラスの心組皆樣の御光來を觀迎す。

家庭部、阪本花代氏の御辭職があつたその後ミスローパートソン代つて西洋料理の諸組を從前通りやつて

下さる。

商工部、十月三十一日小名木川工場起業記念祝賀會とて、其餘興の一部に運動會が場内の學校に出席の女工及男工の有志者に寄て行われた、當日約百二十名の女工が衿と袖に二本の白線の入た黒のミディーとブルマスを着用し白バラの飾つた黒帽子、黒の運動靴甲斐〴〵活潑であつた、フォークダンスや表情、體操、徒競爭提打競爭と輕妙に仕終つた最後の行進は特に人目を引き何らかの暗示を見物人に與へ得る事を喜んだ。

T、S、クラブでは毎月曜午後二時半より一時間應急手當講習會がパンカーク氏の指導のもとに行はれて居る。

學生部、十一日平和記念日に田川大吉郎氏の國際聯合に關して最も有益な講話があつた、祈禱週の第一日は中西氏の萬國女子青年會の話、第二日中西氏のアフリカ、第三日ミスマキナンのアメリカ、第四日中西氏のアジヤ、第五日志立やな子孃のヨーロッパ第六日ミスダンカンのオートラリア等の話、毎日四時半より來會者平均約三十名であつた。

體育部、ミス、メーション、毎水、金の午後大井町の體育協會體操場に開かる體育ダンス講習會で男子體育指導者に教へらる。先生の御熱心に益々體育の發達を見らる。

神戸基督教女子青年會報告

十一月六日幹部委員會に於て織田安子姉會長辭任の件を協議、同姉の辭意を了とし會長として前副會長伊津野五枝姉を副會長として塚本ふじ子姉を選擧す。

教育部はミス、リンストラムを聘して西洋禮法の組を始む第一日に卅九人の來會者あり。

大正九年以來本會内に置かれし海外渡航講習所は近く兵庫縣廳内に移轉の筈從來の通り大呑幹事は講習所囑託として勤務の筈。

毎月一回開き居る男女青年會職員會は本會に於て

職員會を開き敎會と基督敎青年會との關係について論議し此席に二名の牧師も出席され胸襟を開きたる有益にして愉快なる會合をなす。

三菱職工學校よりの要求によりミス、チャッペル同校生徒母姉の爲理料實習をなす、來會者婦人卅名男子十名にてライスカレー、ビーフスチューを料理し營養食料につゝいて講演す。

祈禱週は毎日會館にて一回乃至二回祈禱會を開く各回共二十名より五十名の來會者あり司會等は殆んど幹部委員之に當らる。

男子靑年會及同會體操敎師ブラドレー氏の御好意により今週より外國婦人體操の組を開く、近く日本婦人の爲にも同樣の組を開き度希望あり。

來る十八日男女兩基督敎靑年會合併にてファミリーパーテイを開く筈。

廿五日には家具購入の目的にて東京より文化映畫會に托して映畫會を開く筈。

大阪基督敎女子靑年會報告

一、宗敎部の新しい試みとして十一月から毎月一回幹部委員及び當會の各部委員を中心とし指導者達の爲聖書研究會を開く事となり、其第一回を去る六日に催しました。右講師として靑木澄十郎氏を御願いたしました。同部主催の下に來る十七、十八の兩夜傳道集會を開きます。講師は河邊貞吉氏、此集合が當會に出入する若き姉妹方の求道叉決心の機會となり得ますやう願つて居ります。宗敎部委員の發企で此度一圓宛の寄附金を募り宗敎書を購入する事となりました。此企を實行中に御來阪になりました河井先生にもお仲間入りを願へました事は眞によい紀念でございます。

二、敎育部に新しく二つの組が加へられました。一はミスマキントシ指導の西洋料理初步の組、他は笠原夫人擔任の編物の組。編物は八回の短期講習となし昨日は其三回目でございました、側で見る者の目

にも氣持のよい穏靜かな美しい組でございます。教育部職員會は豫定の通り十月末に催しました。柳原牧師の聖書講義の後晩餐を共にし、其後種々教授上の意見交換をなし有益な集合でした。目下教師は外人六名、日本人十名でございます。

三、商工部の働は追々新しい方面に伸びつゝあります。最近の催として去る七日九日の兩夜白木屋パーテイを開催いたしました。ＹＷＣＡライスと私共が名づけました手製の御夕飯を共にし其後時の移るのも知らぬ程音樂やゲームに夢中になりました。二晩目に河井先生の御話を伺ふ事が出來ましたのは本當にありがたい事でした。先生のお話に熱心に聞入つて居る若い人達の輝いた顏は私共の腦裏に深い印象を殘して居ります。當夜の光景は新聞社の寫眞班が寫してくれました。同部又銀行、商店、お役所に働かるゝ姉妹達の間の働の外に近く市内の二工塲に働を開始する事になつて居ります。

四雜、活動寫眞會二十七日中央公會堂にて開催目的は新建築設備費の爲め。讀書會主催講演會廿五日午後講演者及演題。トルストイの見たる性の問題百島操氏。

京都基督教女子青年會報告

組織の階梯に入ろふとして居る京都女子青年會は今秋以後の凡ての活動がこれに導く爲めの道程であるやうに委員も會員も幹事も考を之れに集中させ度いと存じて居ります。

その第一着として去る十一月十一日

○婦人講演會を開き會員を中心に一般婦人をも加へて河井先生の「京都婦人の使命」につき御講演を伺ひました。輕快にして熱心な先生の御話は多くの來會者に女子青年會の精神をつたへるに充分でございました。

○幹事聖書研究會、每朝十時の禮拜の他に每月曜日聖書研究會を事務打合會の前にいたして居ります。各幹事は交代に指導者となつて居ります。大きな組

織の仕事をひかへて居る時にこれは幹事の精神を研く唯一の機會であれかしと祈つて居ります。

○幹事アットホームデー、毎木曜日午後三時より六時迄各幹事揃つて御客樣を迎へる日と定めてあります。目下は十二月初旬に開かれる「廉賣デー」の準備として仕事會にして居ります。委員會員、教育部生徒、各クラブ員打混つて愉快な半日を過しつゝ會の爲めた働いて居ります。

○家庭パーテー、前號に報じてありました通り十一月六日夜新家庭を中心に卅餘名の男女を招待しハロキンパーテーを催し無邪氣な高尚な社交の機會をつくり大成功でした。

○幼稚園教師クラブ及各教會青年女子指導研究會は共に十一月に出來たものであります。前者は市内基督教各幼稚園の教師が社交の折をつくる爲めと研究の機會をもつくり度い希望から出來上つた、ほんとに將來ある眞面目な會合です。後者は一時的研究で毎週一回當會幹事が指導者になつて各教會の若い婦人方を導く最上方法を研究して居ります。

美しい秋の京都と靜かにしかし確實に歩み出して居る京都女子青年會とは全國の皆樣を歡迎して居ります。

青山女學院女子青年會報告

青山の青年會は今まではたゞ名ばかりでべつにこれとした働きはして居りませんでした生徒も心から神のため人のためにして居らなかつた樣でしたそうなつて居つたのも無理はありませんよく小さい生徒達たちに女子青年會と云ふものはどんなものかといふ事をよく知らせておらなかつたものですから小さいものばかりでなく大きい人でも眞の意味をしらないでたゞ集りがあれば無意味に集つて居る方が多くありました。この夏の修養會後大いに私たちは考へましてもつと〳〵眞にめざめ心から神のため人のために働かなければならないと思ひました二學期から小林先生と相談しましてこの後の方針をきめましたやはり會長は小林先生にそしてその下に副會長の樣にしてミスチニーを他の事はすべての人が心をあはせていたしますがその中心となるために五人の人をえらびましたそれはやはり修養會に行つたものがよいだらうといふ事になつて宗教部の方を足立、桟敷の兩氏に會計は由利、紀志の兩氏に書記を私にしましたそして火曜日の晝にその五人と會長が集つてその週の青年會の事について相談します又組から二人づゝ人をえらびましてその人たちとも金曜日に集つて前にきめた事を報告いたします青年會の集りは木曜日の晝に三年以上と以下の二つにわけましていたします司會は先生が

され時には生徒もする事にいたします。青年會の働として學用品を校內でうつて居ります、生徒たちはよろこんでかつて下さいます、外の働としては本所の貧民くつのおてつだいをする事が二學期の一つの仕事です內面的ではもつと生徒同志が親くするため又は神の子としてよくなるため小さい集を組々でし又大きい人が小さい生徒の中へ入つたりして聖書を研究し又は話しあつたりして一そう心を一つにして青年會をさかんにしてゆきたいと思つて居りますまだ二學期の仕事も充分して居りませんでおひ〳〵御報告いたします。

尚絅女學校女子青年會報告

木々は紅葉して新しい活氣に滿ちた秋になりましたこの期に働かなければこの美しい自然に對しても申譯がない樣な氣が致します。私共が何か働きたいと思つて居る時、折よく校內同窓會主催のバザーが去る十月十七日にひらかれましたので、其日私共はお出でになつたお客樣方に物質のみでなく、何か精神的方面にもお分け致したいと思ひ又一方には女子青年會を廣く仙臺市の方にお知らせ致したいと思ひましてこの日誰方でも疲れた方が休む事が出來る樣にさつぱりした美しい休憩室を設けました。又別室で新しい果物やピーナッツをお賣りしその場で御自由に召し上る事が出來る樣に飾へました。澤山用意した花束もすぐ賣り切れる程の盛況でした。此の他衛生係お子樣のお世話をする係等をつくりごんなに皆樣をお喜ばせする事が出來たでせう。

會員一同が心を合せて働いた後の心地よさは働いた人のみが知る喜びでした。

近頃の私共は露國窮民救濟の爲に考へたり働いたりして居ります校內に在つては社交部、誘導部の方がポスターに依て救濟の急を告げ、毎朝全校に獻金をして戴いて居ります。又仙臺市の他の女學校に會員を送り御同情を求めて居ります。

私共常時の働としては今新しい計畫をして居ります。其は私共の製作品をアメリカに賣る事で御座います。目下校內には母校建築費募集に懸命になつて居られる同窓會がございますので私共物質的働の方面は誠に苦るしい立場に居るので御座います。それで遠くアメリカの方へ手を延したいとの考になつたので御座います。苦るしい時に望を持つてする事が今私共の生命になつて居ります。かゝる時に他の學校內の女子青年會に深く御同情する事が出來ます事は幸だと存じて居ります。(十一月十一日)

金城女學校女子青年會

私共の青年會はまだほんとうに小さくて何一つとしてこれといふ仕事も出來ないので御座いますが、いつかは神樣のお恵みで此の市にも認められる日がある事と信じて小さな腕をこつ〳〵働せて居ります本學年(四月から)になりましてからは特別の集を五度持つことが出來ました。講師はローガン先生、ヘッセル先生、賀川豐彦先生渡邊善太先生で御座います。集を持つ毎に一步々々神樣に近づく事が出來ますのはたゞ〳〵感謝の外御座いません。

市村校長御旅行中の爲、十月迄は校長代理のスマイス先生が顧問としてお出で下さいましたが、市村先生御歸朝により再び顧問として私共をお助け下さる事となりました。

毎週木曜の祈禱會に、此頃はお氣の毒なロシヤの方々の爲に祈つ

て居ります。

去る十一月九日に青年會の仕事の一つとして小さな音樂會を催しました。眞に豫想外の入塲者で、こういふ事をした經驗のない私共は全くテンテコ舞を致しました。然し皆心を併せて全力を盡す事が出來ましてほんとうに嬉しう御座います。得ましたお金は修養會建築發の一部と、この青年會の基本金との爲にあてる目的で御座います。私共が一心に働いて得たお金で、一人でも救はれる方がありましたら、それはまあどんなに嬉しい事で御座いませう。

同人欄

在來の習慣よりいへば私達ほもう一人前の大人の年齡であります然し不斷の成長に志す意味に於て私達は永遠の青年、又永遠の未成品でありませう。私達は私達の未成品であることを恥しいとは思ひません、けれども自分達の魂が志をはなれたものとなることは恥しいことだと思ひます、どんなに小さい言語動作の一端にも私達は個々をとほした人格的餘香の薫ずるものあるを尊いと思ひます。

十一月號に於て堀順子姉の『米國のキャンプ生活』といふ記事は世間見ずの自分に窒の隙から天上をのぞくの感をもたせました。身は一室の内にありながらあゝした世界を紹介していたゞけることはうれしいことだと思ひます、村岡花子姉の「地の鹽」も興味深く拜見いたしました、行文、內容ともに質實、しかも流暢なのに敬服いたしました。

「理想の教會」や「修養會の感想」にも若やかな魂の片影が認められてうれしく思ひました、私共の宗敎は心から心にもえて行く即生命的のものでありたいと思ひます、字句も形式も凡てが其の中心の止むに止まれぬ調べからほとばしつたものであれば小さくとも全たからずとも天地に恥ぢぬ氣がします。(T、N)

始めての事とて何もかも勝手が分りませんが、簡單に御挨拶を申上げます。

此の頃私共の家に主の御めぐみが加はつて居る事を新しく經驗致す樣になりました。日々新しく、事々に新しき御導きを受けつゝある樣に思つて居ります。盲目であつた者が見える樣になつたら、私共の今の樣な氣持ではないかと想像して居ります。勿論毎日の生活の出來不出來はございますが、何といつても私共の實際喜んで居る事は、感謝の心持が初めて味ひ得たその一事であります。斯る時に浮いた氣でなく、艱難が來ても困苦が來ても感謝の中に迎へ得る樣に確固として置く必要があると感じて居ります。此處に私共の進歩があるのではないかと思ひ、一層信仰の尊い事を經驗して居る次第であります。

今度、自分の愚かな力なき身を忘れて、同人となり、皆樣の御導きに從ひますのも、矢張主に在る者として感謝のあまりで、その外に何の技能も確信もないのであります。此の無鐵砲な私をごうぞ今より教へ導いて下さるならば、どんなにうれしい事かわかりません一度毎に新しい經驗をつまして頂く事を今から樂しんで居ります。(T、I)

いよ〳〵本誌も新聞雜誌法に改めましたので、ある制限を離れて自由の記事が掲載される事となりました。十九歲のクリスマスを迎へ束縛から解き放されて、活社會の一生命、一勢力となり得ん爲に高く翼ばたきをして居ます。本誌愛讀の諸姉よ、本誌は諸姉あつて生命を維持して居るのです。本誌がより良き生命に伸び得ん爲御助力下され御友人に御紹介下さるならば本誌は益々よきものを諸姉に捧げ得る事と信じます。鈴木雷子姉本月より同人になられ五人の有力な同人を得ました事を感謝してゐます。いろ〳〵よい廣告を與へられる事を喜んで居ます廣告は是非限を通す必要があると存じます殊に本誌の如く選ばれたるものに於ては。

クリスマス受くるよりも與ふるは幸なりとの眞理を敎へて下さつたエス君のあれまし〻日も迫つて來ました。お隣のロシアでは既に數百萬の同胞は饑飢の犧牲となり、今又數十萬の兄弟姉妹罪知らぬ幼子が飢えと寒さと、病の爲に滅び行かうとしてゐます。お互は地

上の物質に惠まれてゐないかも知れませんけれども お互の持つて居るものゝ中から何か分け得るものはないでせうか。道に行き惱んだ時に憩の場所を見つけ、飢えたる時に食を得凍えた時に溫まりを得る喜は名狀し難いものです「いと小さきものゝ一人に仕ふるは即我に仕ふるなり」主の名によつて是等の人々が慰められますならば地上に愛の花が咲きませう。(K、O)

▲新刊紹介▼

沈默の愛　二階堂眞壽著

先きに聖クラヽをものされた同氏は此秋其處女作沈默の愛を公にされた初戀に惱める若者の苦悶、生一本の青年の憧憬のまとゝなつた女性それは可成理想化されたものだ、純眞の愛の燃える處には人は高められ清められ美化されるのだ、愛のみが覗きうる世界をきりひらきたいと言はるゝ氏は確に此一面をよく描き出されて居る。失戀の一青年が誰れでもがこうした場合に取りたがる隱遁の國に足跡をした美しい場面がよく描き出されて居るしかし主につながる彼は戀に破れて愛に生きたそこにクリスチャンが有する光明の世界をほのかに暗示して居る。讀みたい人の爲に

定價　圓三十錢

東京市麴町區元園町一ノ二三

發行所　ロ　ゴ　ス　社

聖フランシスと小さき兄弟　小出正吾著

「小さな花、貧しい花、おゝ聖フランシスよ!! けれども あなたは光つて居ます。悅びに踊つて居ます。あなたは永遠にしぼみません。單純な姿聖淨な香りあなたに觸れるものゝ魂は眞實と眞の生命を取り戾します」と著者は序文に申して居られますが若い現代人の魂のレンズを通して描き出された燃える信仰と暗示に滿ちた本書は讀む人をして神の國へつれて行きキリストから咲き出した美しい花園に遊ばせてくれます。フランシスの書は外にもありますがこうした靈を動かし燃やすやうな書の出た事を喜びます讀みたい人の爲に

定價二圓

東京市芝區西久保八幡町廿五番地

厚　生　閣

婦人と法律原稿は來て居ますが頁數の爲に來月に廻す事になりました。

備考

一御注文は一切前金に願ひます
一御送金は振替でお拂込み下さる事が便利で安全です。但手數料一錢をお加へ下さい。郵便切手代用は一割增
振替東京貳參七貳參番

定價郵稅共

	内地	海外
一部	金貳拾錢	金貳拾四錢
一年前金	貳圓	金貳圓五拾錢

廣告料

一行	金五拾錢
四分一頁	金五圓
半頁	九圓
全頁	金拾五圓

年極又は回數により割引有

大正十一年十一月廿八日印刷納本
大正十一年十二月一日發行

神田區駿河臺袋町十番地
發行兼編輯人　河井道子

東京市芝區櫻田和泉町七番地
印刷人　前川吉治郎

印刷所　右同所　三成舍

神田區駿河臺袋町十番地
發行所　日本基督教女子青年會
電話神田三六五二番
振替口座東京二三七二三番

A Halloween party was held on the evening of November 6th for younger married people. Thirty people enjoyed the fun and it was decided to have such gatherings on the first Monday evening of each month.

Miss Kawai visited Kyoto on the ninth and tenth of November and spoke four times. On Friday she spoke to the student Association at the Doshisha, in the evening at the student prayer meeting and the following morning at chapel. On Saturday afternoon she addressed a meeting of the members of the City Association at the Association rooms.

KOBE

The principal event of the month in the Kobe Association. was the departure of Miss Topping, our general secretary, who has been obliged to return to America on account of ill health. The Sannomiya Station was crowded with the people who came to say good bye to her. People of all classes were there and it was an evidence of the wideness of her influence in the community and the affection with which she was regarded.

The Kobe Association has very little student work but we have observed the World Students' Week of Prayer with at least two meetings each day for the classes or clubs which happened to be meeting thatday. Some of the services have been led by our Board members, others by some of the girls.

Two new classes have been started in our educational department, one a class in etiquette and foreign customs, the other a gymnasium class for foreign women which is being held at the Y. M. C. A. with Mr. Bradley, the Y. M. C. A. Physical Instructor as the teacher. The combined morning and evening classes had a picnic on one of the holidays and the members of the Business Girls Clubs invited the entire night school to a Hallowe'en Party. The clubs are busy with plans for raising their share of the money for the conference buildings at Gotemba.

Three neighborhood clubs have their programs outlined. The meetings are opened with devotions, followed by some form of hand work. There will be talks on the care and feeding of babies, on health, or on foreign customs and etiquette.

The Mitsubishi Company asked us to give a demonstration lesson at their factory for the wives of their employees. They asked that the lesson be given on the cooking of some kind of foreign food which can be served wih rice. Miss Chappell and Miss Onomi went one afternoon and had a lesson on cooking rice curry and beef stew, There were ten men in the class and twice as many women. Miss Aizawa has a Sunday School for the children of the employees of the Kanebo Spinning Company. One hundred fifty to two hundred children attend each Sunday.

One student club has made its fall start under Miss Marsh and Mrs. Watanabe. The other has not yet gathered. Takabatake San has revived the languishing Postal Savings Club, the dead B. G. Club, and has started a new one among some telephone girls, and is about to begin one among the girls in a newspaper office. We hope soon to report a restaurant club. Mrs. Hoshino told a joint meeting of the business clubs about her trip, and brought greetings from some business girls' clubs in America. Now that Mrs. Wood is here, Takabatake San's work will include some factories.

The joint staffs of the three western cities met in Osaka. They decided that on account of the difficulty of schedules fewer general meetings should be held, but that in their place special meetings for general secretaries and for department secretaries should be planned. The first of these is for educational secretaries, early in Novcamber.

The most interesting and absorbing business before the Osaka Association is its new building. The plans have been completed and are in the hands of the contractor. We hope to begin building immediately,-and should like to move into our new home next week! The building will cost about Yen 125,000. With our gifts from America and what we have raised in Osaka we now have Yen 100,000. A few weeks ago a gift of over Yen 6,000 came from friends in England. This was a windfall at this time, and has been put into our furnishings fund.

KYOTO

The teachers of th Christian kindergartens of Osaka, Kobe and Kyoto held a two days conference in Kyoto recently. On the second afternoon the Kyoto Association entertained them at a Garden Party and one hundred persons were present. Later on twelve of the Kyoto teachers met at the Association to form a Kindergarten Teachers Club, which has had two successful and enthusiastic meetingssince.

A class for leaders of girls clubs in the churches is being held at the Kyoto Association during November. The object is to discuss methods of organization and work and to give some practical help with games and programs. After the four weeks of study and discussion, it is hoped to continue with a monthly meeting of leaders in which practical problems can be discussed, and in the distant future perhaps a federation of all the Christian girls' clubs in Kyoto can be effected.

Two of the secretaries recently went to Otsu, which is a thirty minute trip from Kyoto, to help organize a girls' club in the Congregational Church there. Thirty girls from the High School and Normal School in Otsu were present, and the secretaries were asked to visit the Club at regular intervals and help plan their activities. One of the Kyoto Churches has also asked for similar assistance in organizing and carrying on a new club for girls in their church.

underwear. Two dolls of life-size were dressed in infant's clothing, a sleeping basket made of a Japanere kori, a child's play pen etc were shown, and Miss Van Kirk gave a demonstration bath with a real live Japanese baby, who more than justified the modern methods on which he is being brought up.

During the Y. W. C. A. World's Week of Prayer daily meetings were held at 4.30 p. m. after the close of classes, at which different speakers spoke on the country for which prayers were being asked for the day.

Miss Hanayo Sakamoto, who since her return from America three years ago, has had charge of the department of Household Economics, has resigned from the Tokyo Y. W. C. A. to be married.

OSAKA

The Osaka Association staff has changed considerably since the summer. Miss Allen left us for a year in China. But Mrs. Henderson who made the vacancy for Miss Allen in China is in Osaka, and is teaching two hours of Miss Allen's old classes. Miss Mc Intosh, and Miss Marsh, our languagestudents whom we were mighty glad to welcome, are giving two afternoons and an evening to the Association. Kono San is now office and household science secretary. Miss Ragan is responsible for the educational work until the right Japanese secretary can be secured.

The educational department has a full staff of good teachers for both day and night classes. Our one great need is a full-time English teacher for all the requests which come to us from schools and private pupils. At our first teachers' meeting before the opening of classes sixteen of twenty-one teachers were present for supper and discussion. This is to be a monthly feature.

The Religious Work committee under Asai San has planned several new classes, one for inquirers, one for day pupils in the Thursday classes, a monthly class for the Board and other women on Board meeting day, also a class for the teachers' monthly meeting. The Sunday afternoon meetings are better attended this fall than formerly.

The Membership committee did itself proud in a membership party on October 17, attended by about eighty, thirty more than we can usually gather. The program showed the work of some of the classes; was followed by a skit showing the kinds of girls asking and receiving welcome in the Assoeiation, and a talk by Nakaji San, chairman of the Membership committee. The cooking class had an exhibit of their handiwork,–a light supper for all

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume 19 December 1922 Number 12.

NATIONAL

Miss Kawai sailed from Kobe on November 16, for China. She will give a series of Evangelistic talks for the Japanese Christian Church in Shanghai and after that will spend some time visiting the Association work in China. Our Association leaders in that country are eagerly anticipating Miss Kawai's visit. We feel that such an interchange of friendly visits between the two conntries makes for the best kind of internationalism.

We are now established in our new office which is pleasant and commodious. It is a great joy after the crowded qnarters in which we have been living of late. Soon after we moved in we had a house warming at which time we introduced our new secretaries. A goodly number attended even though the afternoon was stormy and we felt that the office looked very nice. Our appreciation of our new quarters may have made us a bit partial to its appearance.

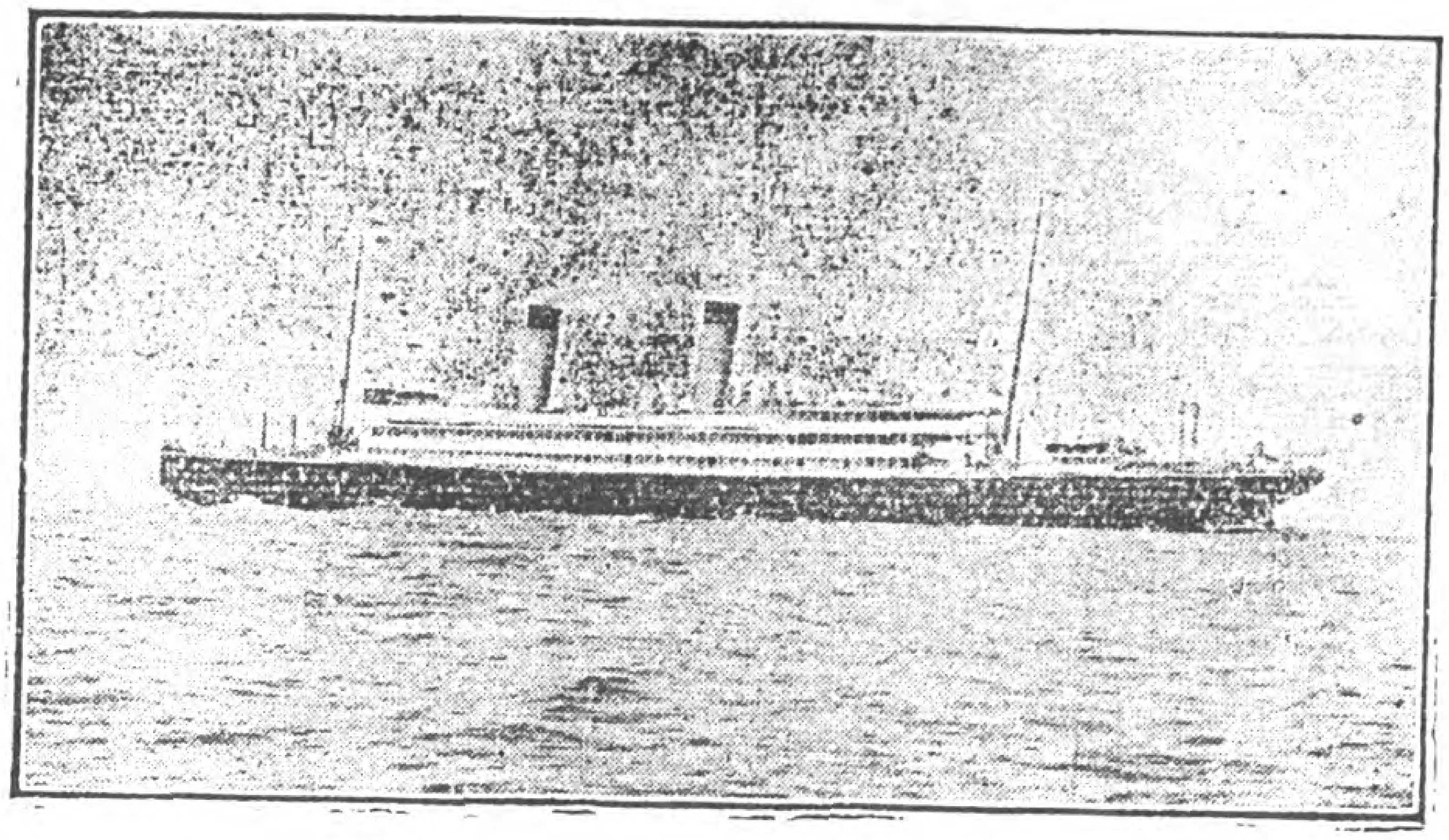
TOKYO

On the National holiday, the 31st of October, an athletic meet was held at the Fuji Spinning Mill, in which the girls, whom Mrs Suzuki had directed in recreation twice a month on their rest days, took part. As the Y. W. C. A. secretaries approached the gate of the grounds, the girls dressed for the first time in foreign gymnasium suits came running to greet them, saying, "We want to shake hands; we dont feel like making a Japanese bow in our new foreign suits". One hundred and thirty girls took part in the races and games, and different groups did the folk dances of their respective provinces. A bazaar was held the same day as well, at which were sold articles, the materials of which were bought at great sacrifices and made up by the girls themselves to raise money for a church that is to be built in connection with the factory.

The Typewriting Shorthand Club began a course under Miss Van Kirk in First Aid and Home Nursing, in which 16 girls were enrolled. Practical demonstrations are given and in the first lesson the girls were shown how to give a patient a bath between futons.

The Household Economics department held an exhibit this month of infants' and children's foreign clothing and of women's

東洋汽船株式會社



本社 東京市麴町區永樂町一丁目一番地（電話丸ノ内一五三〇、一五三二、一五三一、一五三三番）

營業所 橫濱市山下町五番（電話本局四四〇〇、四四〇一、四四〇二、四四〇三番、四四〇四）

出張所 神戸市海岸通七番地。香港、キングス、ビルヂング。上海四川路ノース、チャイナ、インシュランス。ビルヂング。マニラ、チャコビルヂング。桑港、マーケット街六五二、マーチャンツ、ナショナル、バンク、ビルヂング。紐育、ブロードウエイ、一六五。ホノルヽ、アレキサンダー、ヤング、ビルヂング。

北米航路（桑港、布哇ホノルヽ、橫濱、神戸、長崎、上海、マニラ、及香港間）

本航路は太平洋航路中氣候温和、海上平穏なること第一にして船舶の巨大、設備の完全、待遇の懇切とに由り航海最も安全且つ快なり

船名	備考	排水量
大洋丸		排水量 二二、〇〇〇噸
天洋丸	さいべりや丸波斯丸は往	同 二二、〇〇〇噸
春洋丸	復共大連に寄港す	同 二二、〇〇〇噸
コレヤ丸	大連航路の偉觀なり	同 二〇、〇〇〇噸
サイベリヤ丸		同 二〇、〇〇〇噸
波斯丸		同 九、〇〇〇噸

南米航路（香港、門司、神戸、橫濱、布哇、桑港、羅府、墨國、巴奈馬、秘露及智利諸港間）

本航路は東洋南米唯一の定期航路なり

船名	排水量
安洋丸	排水量 一八、七〇〇噸
銀洋丸	同 一六、〇〇〇噸
樂洋丸	同 一八、五〇〇噸
靜洋丸	同 一四、〇〇〇噸

各寄港地及各國樞要都市に代理店の設備あれば船室保留並に發着日割等は最寄に就て御問合せを乞ふ

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可
大正十一年十二月一日發行（每月一回一日發行）
女子青年界第十九卷十二月號

一部定價二十錢

復刻版 女子青年界 第13巻

1993年1月25日発行
本体価格 22、000円

発行者 船橋 治
発行所 不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
〒113 ☎03(3812)4433
印刷所 三進社
製本所 青木製本所
中性紙使用
乱丁・落丁はお取り替えいたします。